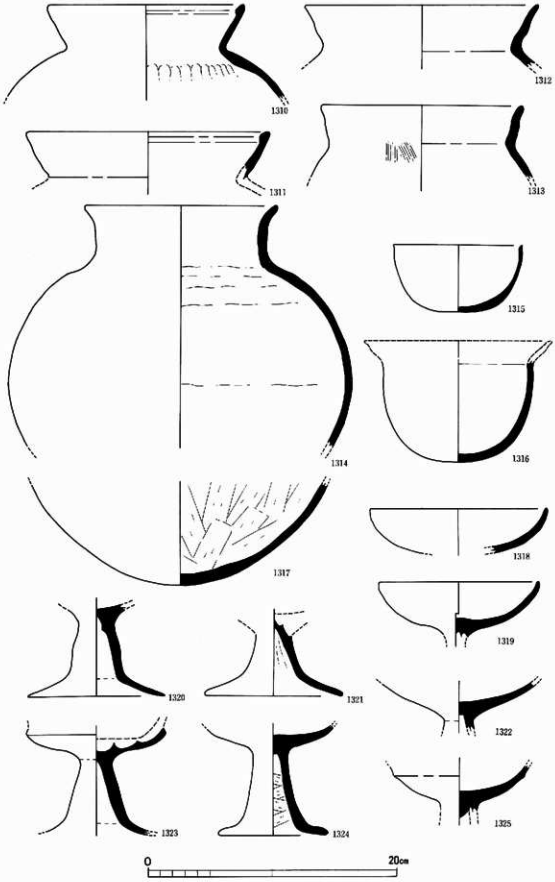
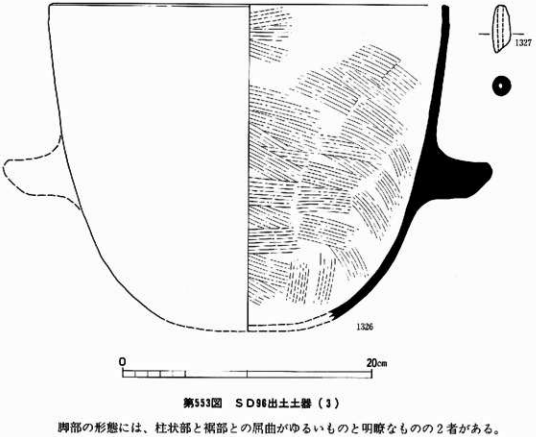


第552図　ＳＤ96出土土器（２）



第553図　ＳＤ96出土土器（３）

脚部の形態には、柱状部と裾部との屈曲がゆるいものと明瞭なものの２者がある。

調　内面の調整に粗いハケメを施している。

時期　主に須恵器の検討によれば、川除８期を中心とし、それより若干新しいものおよび川除９期のものである。

第213表　ＳＤ96出土土器観察表（１）

番号	器種	法量（cm）	調整	色調	残存率	備考
1301	須恵器 蓋	口径：(12.2)　底径： 器高：2.5　摘径： 体部径：	外面：体部にヨコナデ、天井部の4/5に時計回りの回転ヘラケズリ 内面：ヨコナデ、中央に仕上げナデ	外面：灰白 内面：灰白	体部・天井部約1/2	
1302	須恵器 坏	口径：　底径： 器高：残3.1　摘径： 体部径：	外面：底部4/5に時計回りの回転ヘラケズリ、たちあがりにヨコナデ 内面：ヨコナデ	外面：灰白 内面：灰白	受部から体部上半1/10	
1303	須恵器 高坏蓋	口径：　底径： 器高：残2.4　摘径： 体部径：	外面：天井部2/3に逆時計回りの回転ヘラケズリ、つまみはナデ 内面：ヨコナデ	外面：灰白 内面：明青灰	つまみ完存 天井部は1/10	
1304	須恵器 壺	口径：　底径： 器高：残5.9　摘径： 体部径：(12.7)	外面：体部下半ヨコナデ、沈線の間に５条単位の櫛描波状文 内面：口縁部ヨコナデ、体部はヘラケズリ	外面：明青灰 内面：明青灰	体部下半は完存	
1305	須恵器 壺	口径：(9.2)　底径： 器高：3.1　摘径： 体部径：	外面：天井部をナデ、その他はヨコナデ 内面：ヨコナデ	外面：灰 内面：灰	口縁部1/10 体部1/2	
1306	須恵器 坏	口径：(9.4)　底径：(4.4) 器高：3.3　摘径： 体部径：	外面：底部はヘラ削こしのち未調整、体部はヨコナデ 内面：ヨコナデ	外面：灰白 内面：灰白	体部下半は完存	
1307	須恵器 坏	口径：(11.8)　底径：(8.2) 器高：残3.9　摘径： 体部径：	外面：底部はヘラ削こしのち未調整、体部はヨコナデ 内面：ヨコナデ	外面：灰白 内面：灰白	口縁部1/4 底部1/10	

第214表　ＳＤ98出土土器観察表（２）

番号	器種	法量（cm）	調整	色調	残存率	備考
1308	須恵器 壺	口径　：(18.4)　底径： 器高　：残9.5　胴径：11.0 体部厚：	外面：胴部3条／cmの平行タタキ、口縁部にはヨコナデのち突帯が2条、その間に5条単位の櫛描波状文を3段施文 内面：ヨコナデ	外面：灰 内面：灰	口縁部1/4 胴部1/10	
1309	須恵器 壺	口径　：(21.0)　底径： 器高　：残7.7　胴径：(17.6) 体部厚：	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	外面：明青灰 内面：明青灰	口縁部1/2	
1310	土師器 皿	口径　：(15.6)　底径： 器高　：残4.2　胴径：(13.0) 体部厚：	外面：口縁部にヨコナデ、胴部にナデ 内面：口縁部にヨコナデ、体部はユビオサエのち淡時計回りのヘラケズリ	外面：橙 内面：橙	口縁部1/2 体部1/3	
1311	土師器 皿	口径　：(19.1)　底径： 器高　：残3.6　胴径：(15.9) 体部厚：	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ	外面：にぶい橙 内面：灰白	口縁部1/6	
1312	土師器 皿	口径　：(18.4)　底径： 器高　：残4.9　胴径：(15.8) 体部厚：	外面：口縁部ヨコナデ、胴部に粗方向のハケメのちナデ 内面：口縁部にヨコナデ、体部は磨滅のため調整不明	外面：橙 内面：橙	口縁部・体部約1/6	
1313	土師器 皿	口径　：(15.8)　底径： 器高　：残3.8　胴径：(14.8) 体部厚：	外面：口縁部にヨコナデ、胴部に粗方向のハケメ（5本／cm） 内面：口縁部にヨコナデ、体部は磨滅のため調整不明	外面：橙 内面：にぶい橙	口縁部・体部約1/2	
1314	土師器 皿	口径　：(15.0)　底径： 器高　：残19.0　胴径：(13.7) 体部厚：(27.4)	外面：口縁部にヨコナデ、体部は磨滅のため調整不明 内面：口縁部にヨコナデ、体部は磨滅のため調整不明	外面：橙 内面：にぶい黄橙	口縁部・体部約1/4	
1315	土師器 皿	口径　：(19.2)　底径： 器高　：5.4　胴径： 体部厚：	外面： 内面：　磨滅のため調整不明	外面：にぶい橙 内面：浅黄橙	口縁部1/10 体部破存 底部1/2	
1316	土師器 鉢	口径　：　底径： 器高　：残8.0　胴径： 体部厚：	外面：胴部に縦方向のナデ 内面：胴部に横方向のナデ	外面：浅黄 内面：灰白	体部1/2	
1317	土師器 壺	口径　：　底径： 器高　：残8.2　胴径： 体部厚：	外面：磨滅のため調整不明 内面：縦方向のヘラケズリ（下から上方向）	外面：浅黄橙 内面：浅黄	体部下半1/2	
1318	土師器 高坏	口径　：(14.0)　底径： 器高　：残3.5　脚径： 体部厚：	外面：ナデ 内面：磨滅のため調整不明	外面：にぶい橙 内面：にぶい橙	坏部約1/5	
1319	土師器 高坏	口径　：12.6　底径： 器高　：残4.4　脚径： 体部厚：	外面： 内面：　磨滅のため調整不明	外面：橙 内面：にぶい橙	坏部破存	
1320	土師器 高坏	口径　：　底径：(11.0) 器高　：残7.3　脚径：(3.8) 体部厚：	外面： 内面：　磨滅のため調整不明	外面：橙 内面：橙	柱状部破存 脚部約1/10	
1321	土師器 高坏	口径　：　底径：(19.8) 器高　：残6.6　脚径：(2.9) 体部厚：	外面： 内面：　磨滅のため調整不明	外面：橙 内面：橙	柱状部破存 脚部約1/3	
1322	土師器 高坏	口径　：　底径： 器高　：残3.8　脚径： 体部厚：	外面： 内面：　磨滅のため調整不明	外面：橙 内面：明黄灰	坏部1/10	
1323	土師器 高坏	口径　：　底径： 器高　：残8.4　脚径：2.1 体部厚：	外面：磨滅のため調整不明 内面：脚部内面は緩時計回りのヘラケズリ	外面：赤褐 内面：にぶい赤褐	体部2/3 柱状部破存	
1324	土師器 高坏	口径　：　底径：8.4 器高　：残8.7　脚径：2.8 体部厚：	外面：磨滅のため調整不明 内面：脚部内面は緩時計回りのヘラケズリ	外面：橙 内面：灰白	体部1/10 柱状部破存 脚部3/4	
1325	土師器 高坏	口径　：　底径： 器高　：残3.8　脚径：(2.9) 体部厚：	外面：ヨコナデ 内面：ナデ	外面：灰白 内面：灰白	体部約1/4	
1326	土師器 甑	口径　：(21.2)　底径： 器高　：残29.9　脚径： 体部厚：(26.8)　把手下端での計測	外面：口縁部にヨコナデ、体部に斜方向のハケメ 内面：口縁部にヨコナデ、体部に斜方向のハケメ	外面：明赤褐 内面：明赤褐	口縁部1/4 体部1/4	
1327	土師器 土錘	長さ　：3.8 直径　：1.5 円孔径：0.4		外面：浅黄 内面：灰白	2/3	

ＳＤ１０７

検出状況　Ⅳ区中央部をほぼ直線的に北東から南西方向にはしる溝である。ただし、本溝については、一部をのぞいては平面的に掘ることはできなかった。平面的に調査できたのは、本溝の北東部約20mに限られる。他は、調査区南西側壁および調査終了後の東西方向の深掘りトレンチの断面観察で確認したにすぎない。したがって、全体図（第500図）に示してある本溝は、これらの断面観察の結果から復元したものである。

形状・規模　復元される全長は約85mである。ただし、本来はもっと北東部側は調査区側壁までのびていたものと推定される。ただし、この本溝がのびると推定されるあたりが、ＳＤ86と重複するため、北東側の調査側壁において本溝を確認できなかったものと考えられる。

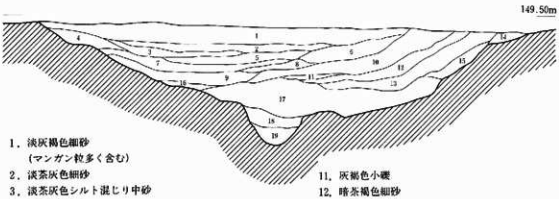
検出面における幅は５mを測る。横断面は緩やかなＶ字形を呈するが、溝中央部は断面Ｕ字形と一段低くなっている。溝中央部における検出面からの深さは124cmである。

埋土　単純なシルト層は少なく、大半は細砂から小礫を多く含む層相である。これらの砂礫層中にはいくつかの不連続面が認められることから、何回かの濁流により埋没していったものと考えられる。本溝がほぼ直線的に走っていることからも、淀むことなく流速が早かったものと推定される。また、断面をより詳しく観察すると、本溝は何回か掘りかえされていることがわかる。溝の埋没→掘削という循環を繰り返していたものと推定される。

出土遺物　埋土中より土器のみが出土している。器種としては、須恵器と土師器が出土しており、その割合は半々である。

須恵器　坏・蓋・高坏が出土しているが、坏身については小片のため図化できなかった。坏蓋は、口縁端部がシャープにつくられており、天井部のヘラ削りの範囲も広範囲である。また、高坏については脚部の透かしが円形である点が特徴的である。

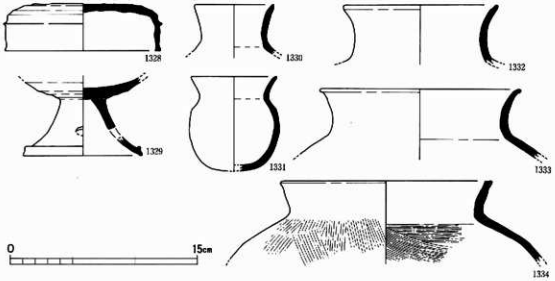
土師器　甕・壺・高坏が出土しているが、図化できたのは壺と甕に限られる。



1．淡灰褐色細砂
　(マンガン粒多く含む)
2．淡茶灰色細砂
3．淡茶灰色シルト混じり中砂
4．茶褐色礫砂
5．灰褐色礫混じり中砂
6．淡灰褐色中砂
7．暗茶灰色シルト（炭化粒・粗砂混じる）
8．明茶褐色粗砂
9．淡灰色砂質シルト
10．茶灰色礫混じり中砂（マンガン・土器多く含む）
11．灰褐色小礫
12．暗茶褐色細砂
13．暗茶褐色小礫
14．淡灰褐色細砂
15．淡茶褐色細砂
16．淡灰色細砂
17．灰色小礫
18．暗灰褐色礫混じり中砂
19．暗灰色中砂

0　2m

第554図　ＳＤ107横断面



第555図　ＳＤ107出土土器

時期　出土土器から川除８期と考えられる。

遺構の性格　本溝は、ほぼ直線的に走る溝で、しかも小微高地ｄの主軸に対してほぼ直交するよう本小微高地を貫いている。しかも、北東部においてはほぼ同時期に掘削されたＳＤ86と合流する可能性も考えられる。したがって、一部しか平面的に調査できなかったためあくまでも推定の域をでないが、本溝はＳＤ86から分岐し、小微高地ｄとｅの中間部の低地へ流れるための用水施設であったのではないかと考えられる。

第215表　ＳＤ107出土土器観察表

番号	器種	法量（cm）	調整	色調	現存率	備考
1328	須恵器 壺	口径：（12.5）底径： 器高：3.7　頸径： 体部径：	外面：体部にヨコナデ、天井部の広い範囲に繰り返しのケズリ 内面：ヨコナデ、中央に仕上げナデ	外面：灰 内面：にぶい黄橙	体部1/4 天井部完存	
1329	須恵器 高杯	口径：　底径：（9.2） 器高：残6.2　脚径：（3.7） 体部径：	外面：杯部下半に稜状の回転ヘラケズリ、脚部にヨコナデ 内面：杯部中央にヨコナデののち仕上げナデ、脚部にヨコナデののち円孔をヨケ所に寄つ	外面：青灰 内面：青灰	杯部1/10 脚部1/2	
1330	土師器 壺	口径：（6.4）底径： 器高：残3.8　頸径： 体部径：	外面： 内面： }摩滅のため調整不明	外面：橙 内面：橙	口縁部完存	
1331	土師器 壺	口径：（6.8）底径： 器高：7.5　頸径：（5.6） 体部径：7.2	外面：口縁部にヨコナデ、体部は磨滅のため調整不明 内面：口縁部にヨコナデ、体部にユビオサエののちナデ	外面：橙 内面：橙	口縁部1/3 体部1/2	
1332	土師器 壺	口径：（12.2）底径： 器高：残4.5　頸径：（10.6） 体部径：	外面：口縁部にヨコナデ 内面：口縁部にヨコナデ、体部にユビオサエののちナデ	外面：淡黄橙 内面：淡黄橙	口縁部1/6	
1333	土師器 甕	口径：（16.0）底径： 器高：残5.5　頸径：（15.0） 体部径：	外面：口縁部にヨコナデ、体部に磨滅のため調整不明 内面：口縁部にヨコナデ、体部に磨滅のため調整不明	外面：橙 内面：淡黄橙	口縁部3/4	
1334	土師器 甕	口径：（15.6）底径： 器高：残6.4　頸径：（15.5） 体部径：	外面：口縁部にヨコナデ、体部は縦方向のハケメ（4条／cm） 内面：口縁部にヨコナデ、体部は横方向のハケメ（6条／cm）	外面：橙 内面：淡黄橙	口縁部・胴部の1/4	

ＳＤ１０８

検出状況　Ⅳ区の北東部、小微高地ｄの中央やや東寄りで検出されている。ＳＤ109に切られている。南北方向に走行するが、両端部ともしだいに浅くなって消滅している。

形状・規模　長さは19.0mが確認された。幅は、検出面で0.98～1.20m、溝底で0.30～0.60mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは31～41cmである。溝底の標高は、北端で148.99m、南端で148.88mである。

埋土　５層程度に分かれる。茶灰色や黄灰色細砂混じりの層が顕著であり、堆積物の粒子は比較的大きいものである。

出土遺物　遺物は出土していない。

時期　遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、埋土の特徴などから川除８期と考えるのが妥当である。

ＳＤ１１２

検出状況　Ⅳ区の中央西寄りの、小微高地ｄの中央南寄りで検出されている。ＳＤ96と平行しており、中世の掘立柱建物ＳＢ63に切られている。

形状・規模　長さは13.2mが確認された。幅は、検出面で0.83～1.55m、溝底で0.50～1.05mを測る。横断面はＵ字形を呈し、検出面からの深さは４～20cmである。溝底の標高は、北端で149.44m、南端で149.38mである。

埋土　茶灰色シルト質極細砂の堆積が認められた。

出土遺物　出土していない。

時期　埋土の特徴から、川除８期と考えられる。

ＳＤ１２０

検出状況　Ⅳ区南東部に位置する。ほぼ南北方向に、弧状にのびる溝である。北側はＳＤ86に取りつき、南側は時期不明の撹乱により切られている。

形状・規模　検出した長さは、約11mである。横断面はＵ字形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは７cmを測る。検出面における幅は32cmである。溝底部のレベルはほぼ一定しており、北端部における標高は148.92mである。

埋土　褐灰色砂混じりシルト層１層が堆積していた。

出土遺物　全く出土していない。

時期　遺物が出土していないため、時期を特定する材料に欠くが、埋土およびＳＤ86との関係から、川除８期と考えられる。

ＳＤ１２８

検出状況　Ⅳ区の南西部で検出している。小微高地の単位でいえば、小微高地ｄの南西部にあたり、この小微高地の南側の落ち際から約20m北側に位置している。溝の方向は小微高地の方向に直交して検出され、北東から南西の方向をとる。北東端から約1.2mの位置で土壙と重複して検出されている。前後関係は土壙に切られている。南西端はＳＤ129と重複して検出さ

れている。切り合い関係は不明である。

形状・規模　長さは検出された部分に限っては、5mが検出された。幅は検出面で0.14～0.25m、溝底で0.05～0.26mを測る。北東側に狭く、南西側にやや広い形状を呈している。断面形は最も広い所で皿形に近いU字形を呈する。検出面からの深さは4～6cmであり、溝底の標高は北東側で149.28m、南西側で149.28mと差は全く認められない。

出土遺物　遺物は出土していない。

時期　遺物が出土していないため、時期の設定は困難であるが、ＳＤ129との切り合いが不明確であることは、ＳＤ129と関連する遺構である可能性もあり、川除8期と考えられる。

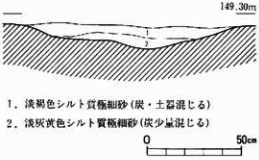
ＳＤ１２９（図版155）

検出状況　Ⅳ区の南西部で検出している。小微高地の単位でいえば、小微高地ｄの南西部にあたり、この小微高地の南側の落ち際から約20m北側に位置している。溝の方向は小微高地の方向に平行に検出され、北西から南東の方向をとる。北西端から約3.1mの位置で、もう一条の溝が分岐している。前後関係は不明である。南東側はＳＤ128と重複して検出されている。切り合い関係は不明である。ＳＤ128とはほぼ直交している。

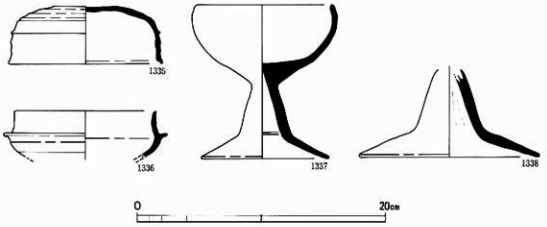
形状・規模　長さは検出された部分で10.5mを測る。幅は検出面で0.25～0.75m、溝底で0.15～0.58mを測る。北西側に狭く、南東側にやや広い形状を呈している。平面形は直行してはおらず、北西側から約3.5mの位置で屈曲している。断面形は最も広い所で皿形を呈する。検出面からの深さは4～12cmであり、溝底の標高は北西側で149.30m、南東側で149.22mとわずかに南東側に傾いている。

出土遺物　遺物は土器のみが出土している。

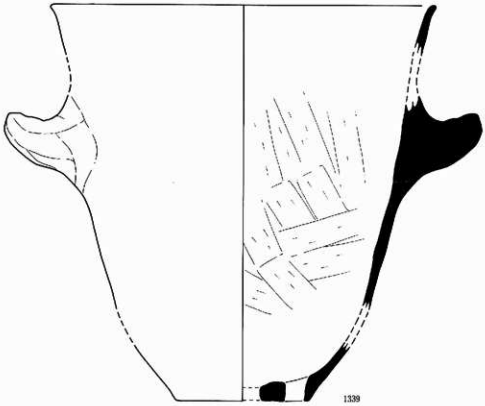
須恵器の蓋・坏、土師器の高坏・甑・椀が出土している。そのうち図化しているものは5点である。



第556図　ＳＤ129横断面



第557図　ＳＤ129出土土器（1）



第558図　SD120出土土器（2）

須恵器　2点、坏蓋と坏身を図化している。

蓋　天井部と体部境にややあまい稜をもつもので、天井部は丸みをもっている。体部は垂直気味に垂下しているが、端部はやや外方に開いている。端部内面は凹みをもつ。

坏　たちあがりは直立ぎみで、端部内面はわずかに凹んでいる。受部は水平気味に外方にのびている。底部は欠失しているが、2/3程度に逆時計回りのヘラケズリを施している。

土師器　高坏を2点と甑を1点図化している。

高坏　1337は椀形の坏部をもつ高坏である。坏部は内湾ぎみに立ち上がる口縁部に内傾する口縁端部をもつ。脚部は外傾する脚柱部に屈曲して開く裾部をもっている。調整は磨滅のため不明である。

1338は坏部を欠失しているもので、脚部のみの残存である。外傾する脚柱部に屈曲して開く裾部である。脚柱部内面には絞り目が観察される。

甑　体部下位と上位の一部を欠失している。底部の穿孔は5孔で、中心部に1孔、周りに4

孔である。調整は体部外面下半と体部内面に上→下のヘラケズリ、口縁部は横方向のナデで仕上げている。把手は2ケ所、体部に挿入して取り付けられている。

時期　川除8期である。

第216表　ＳＤ129出土土器観察表

番号	器種	法量（cm）	調整	色調	残存率	備考
1335	須恵器 蓋	口径　：(12.2)　底径： 器高：4.5　　鍵径： 体部径：	外面：体部ヨコナデ、天井部の1/3に時計回りの回転ヘラケズリ 内面：ヨコナデのち中央に仕上げナデ	外面：灰 内面：灰	天井部1/2 体部1/4	
1336	須恵器 坏	口径　：(11.2)　底径： 器高：(4.3)　鍵径： 体部径：	外面：たちあがりヨコナデ、底部の2/3に逆時計回りの回転ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	外面：灰白 内面：灰白	たちあがり約1/8 底部約1/4	
1337	土師器 高坏	口径　：(18.7)　底径：(10.0) 器高　：12.2　　脚径：(7.2) 体部径：	外面：， 内面：，　磨滅のため調整不明	外面：橙 内面：橙	坏部1/8 柱状部充存 脚部1/16	
1338	土師器 高坏	口径　：　　底径：(14.3) 器高　：残6.9　脚径：(2.3) 体部径：	外面： 内面：　磨滅のため調整不明	外面：橙 内面：橙	柱状部充存 脚部1/4	
1339	土師器 甑	口径　：(38.2)　底径：(9.9) 器高　：(30.2)　鍵径： 体部径：(23.7)　(把手下端の計測)	外面：口縁部にヨコナデ、矢部下半に上から下方向のヘラケズリ、底部に5孔 内面：口縁部にヨコナデ、矢部に上から下方向のヘラケズリ	外面：にぶい橙 内面：にぶい橙	口縁部1/10 体部1/3 底部1/4	

ＳＤ１３０

検出状況　Ⅳ区の南西部で検出している。小微高地の単位でいえば、小微高地ｄの南西部にあたる。溝の方向は小微高地の方向に直交して検出され、北北東から南南西の方向をとる。北側の範囲外にまで遺構はのびている。他の遺構との重複関係は認められないが、ＳＤ９２に合流していることから、これに流れ込んでいる遺構と考えられる。

形状・規模　長さは検出された部分で24.5mが検出された。幅は検出面で0.18～0.25m、溝底で0.10～0.15mを測る。平面形は南側でややカーブしているもののほぼ直行している。断面形は皿形を呈する。検出面からの深さは5～15cmであり、溝底の標高は北北東側で149.18m、南南西側で148.96mで、南南西側に傾いている。

出土遺物　遺物は土器のみが出土している。須恵器の坏蓋、土師器の甑が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

時期　出土した遺物から川除8期の範疇におさまるものと考えられる。

ＳＤ１３１

検出状況　Ⅳ区の南西部で検出している。小微高地の単位でいえば、小微高地ｄの南西部にあたり、この小微高地の南側の落ち際から約20m北側に位置している。溝の方向は小微高地の方向に平行に検出され、全体として北西から南東の方向を指している。他の遺構との切り合い関係は認められない。当遺構は南東側は途切れているが、北西側は調査範囲外にまでのびている。

形状・規模　長さは検出された部分で7mが検出された。

幅は検出面で0.45～0.55m、溝底で0.18～0.35mを測る。平面形は直行してはおらず、全

体として弓状を呈している。断面形は皿形を呈する。

検出面からの深さは７～９㎝であり、溝底の標高は北西側で149.25m、南東側で149.25mで全く差は認められない。

出土遺物　遺物は出土していない。

時期　遺物が出土していないため正確な時期は明らかではないが、川除８期の範疇におさまるものと考えたい。

ＳＤ１３２

検出状況　Ⅳ区の南西部で検出している。小微高地の単位でいえば、小微高地ｄの南西部にあたり、この小微高地の南側の落ち際から約17m北側に位置している。溝の方向は小微高地の方向に平行に検出され、全体として北西から南東の方向を指している。他の遺構との切り合い関係は認められない。当遺構は調査区の範囲内で消滅している。

形状・規模　長さは検出された部分で３ｍである。

幅は検出面で0.33～0.40m、溝底で0.15～0.25mを測る。平面形は直行してはおらず、北西側でわずかに北側に向きを変えている。断面形は皿形を呈する。

検出面からの深さは６～９㎝であり、溝底の標高は北西側で149.26m、南東側で149.25mではほとんど差は認められない。

出土遺物　土器のみが出土している。土師器の椀が出土しているが、小片のため図化は出来なかった。

時期　出土している土器から川除８期の範疇におさまるものと考えたい。

ＳＤ１３３

検出状況　Ⅳ区の南西部で検出している。小微高地の単位でいえば、小微高地ｄの南西部にあたり、この小微高地の南側の落ち際から約12m北側に位置している。溝の方向は小微高地の方向に直交して検出され、全体として北から南の方向を指している。他の遺構との切り合い関係は認められない。当遺構は調査区の範囲内で消滅している。

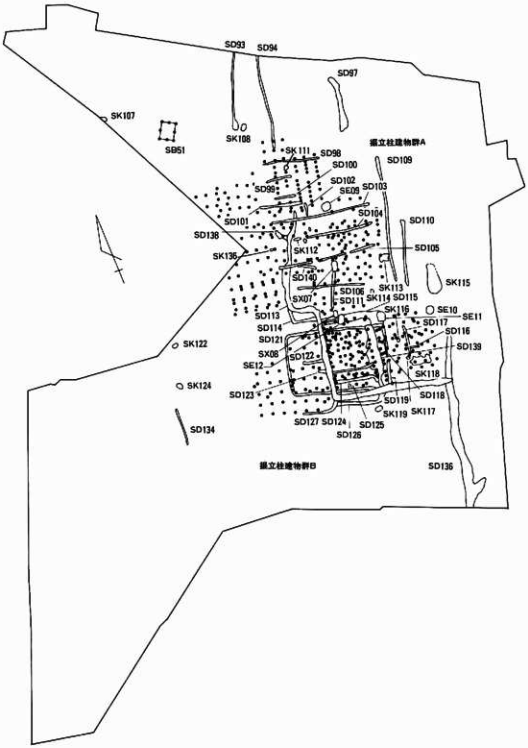
形状・規模　長さは3.5mが検出された。

幅は検出面で0.25～0.35m、溝底で0.15～0.20mを測る。平面形は直行してはおらず、全体として弓状を呈している。断面形は皿形を呈する。

検出面からの深さは４～16㎝であり、溝底の標高は北西側で149.30m、南東側で149.14mで、北西側から南東側に向かって流れている。

出土遺物　土器のみが出土している。いずれも小片であるため器種も不明で、図化もできなかった。

時期　出土している土器が小片であるため正確な時期は明らかではないが、川除８期の範疇におさまるものと考えたい。



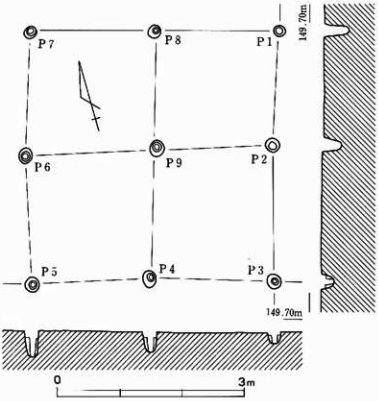
第559図　Ⅳ区平安時代～鎌倉時代の遺構

4．平安時代以降の遺構と遺物

（1）掘立柱建物

SB49

検出状況　Ⅳ区の北西部、小微高地dの中央に位置する。中世の掘立柱建物群Aの最も北に位置する小規模な建物である。SD98の北に接しており、SD92やSK110を切っている。



第560図　SB49

形状・規模　N－15°－Eに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行2間の建物である。規模は桁行方向が4.00m、梁行方向が4.00mの正方形である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行・梁行とも2.00mを測る。面積は16.0㎡である。

柱穴　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は20～24cm、柱痕の直径は10～12cmである。深さは16～52cmを測る。

出土遺物　遺物は出土していない。

時期　他の掘立柱建物と近接し、同一方向に棟軸をもつため、これらと同じ川除11～14期と考えてよいと思われる。

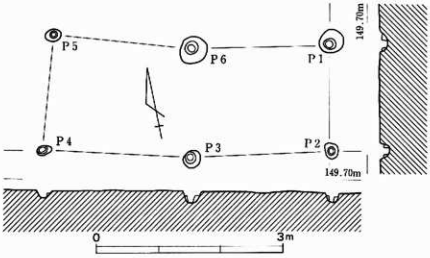
SB50

検出状況　Ⅳ区の北西部、小微高地dの中央に位置する。中世の掘立柱建物群Aの北方を占める小規模な建物である。SD92を切っており、SD98と切り合い関係をもっている。

形状・規模　N－79°－Wに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行1間の建物である。規模は桁行方向が4.56m、梁行方向が1.74mの長方形である。桁行方向の柱穴間の心々間距離は、2.28mを測る。

なお、面積は7.93㎡とこの掘立柱建物群Aのなかにあっては最小規模である。

柱穴　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は20～45cm、柱痕の直径は12～20cmである。深さは10～18cmを測る。



第561図　ＳＢ50

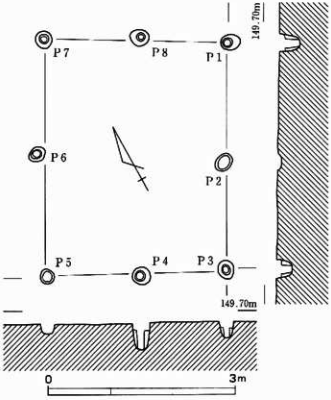
出土遺物　Ｐ５柱痕より須恵器の椀、土師器の鍋が、Ｐ６柱痕より土師器の皿が出土している。

時期　川除14期である。

ＳＢ５１

検出状況　Ⅳ区の北西端、小微高地ｄの中央に位置する。密集する中世の掘立柱建物群Ａの北西方向にやや離れて存在する小規模な建物である。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模　Ｎ－30°－Ｗに棟軸の方向をとる桁行２間、梁行２間の建物である。規模は桁行方向が3.66m、梁行方向が2.91mである。柱穴間の心々距離は、桁行方向が1.83m、梁行方向が1.46mを測る。なお、面積は10.65㎡である。

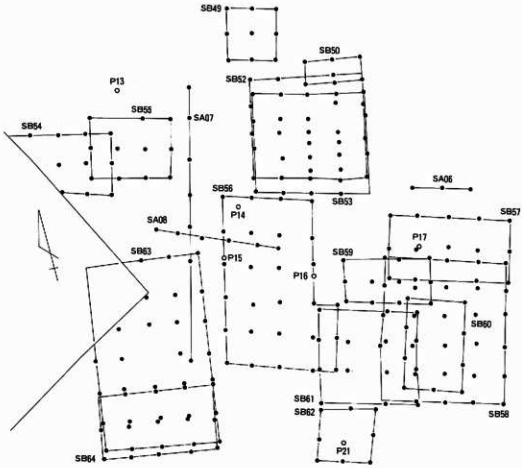


第562図　ＳＢ51

柱穴　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は30cm、柱痕の直径は15cmである。深さは22～50cmを測る。

出土遺物　遺物は出土していない。

時期　遺物が出土しておらず、本遺構の南東方向に密集する中世の掘立柱建物群Ａとは棟軸の方向が異なっているが、掘り方および柱痕の埋土の類似から、川除11～14期と考えられる。



第563図　掘立柱建物群Ａ

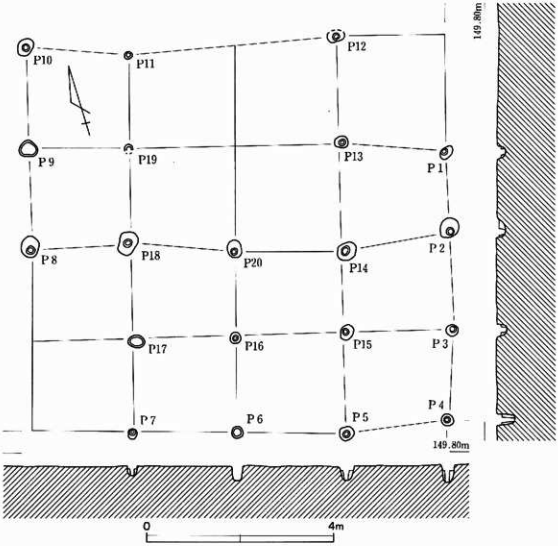
ＳＢ５２（図版１３５）

検出状況　Ⅳ区の北西、小微高地ｄの中央に位置する。密集する中世の掘立柱建物群Ａのなかでも北方に立地する建物である。東西方向にのびる溝ＳＤ98・ＳＤ104の間におさまるが、この２本の溝は本遺構の雨落溝とは考えがたい。古墳時代の溝ＳＤ92・96を切り、中世の溝ＳＤ99・ＳＤ100とも切り合い関係をもつ。また、本遺構の南東方向に近接してＳＥ09が営まれている。

形状・規模　Ｎ－13°－Ｅに棟軸の方向をとる桁行４間、梁行４間の建物である。規模は桁行方向が9.00m、梁行方向が8.20mである。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行方向が2.25m、梁行方向が2.05mを測る。なお、面積は73.80㎡である。

柱穴　20穴が確認され、柱筋の交点に柱穴の認められなかった部分が少なくない。柱穴の掘り方は円形であり、その直径は32～40cm、柱痕の直径は14～16cmである。深さは15～30cmを測る。

出土遺物　Ｐ５掘り方より須恵器の椀が、Ｐ６柱痕より須恵器の甕が、Ｐ７柱痕より須恵器の椀、土師器の鍋、黒色土器の椀、同掘り方より須恵器の甕が出土している。また、Ｐ８柱痕より須恵器の甕、瓦器の椀、土師器の小片、Ｐ17柱痕より須恵器および土師器の小片が出土

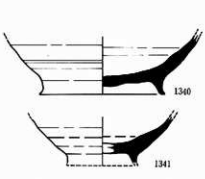


第584図　ＳＢ52

している。

図化した土器は、Ｐ５掘り方出土の須恵器の椀とＰ７掘り方出土の須恵器の椀である。ともに高台をもつ椀である。1340の体部には１条の沈線が巡っており、1341は調整技法および形態から三田市相野窯跡群の産と考えられる。

時期　出土土器から川除11期と考えられる。



第585図　ＳＢ52出土土器

第217表　ＳＢ52出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm) 口・径	器高	底径	厚さ	最大径	重量	色調	残存状況	特徴・その他
1340	須恵器・椀	—	残4.7	(10.0)	—	—	—	灰白	底部1/4・体部わずか	相野窯跡群産　P5掘り方出土
1341	須恵器・椀	—	残3.8	(5.6)	—	—	—	灰	底部1/4・体部わずか	相野窯跡群産　P7掘り方出土

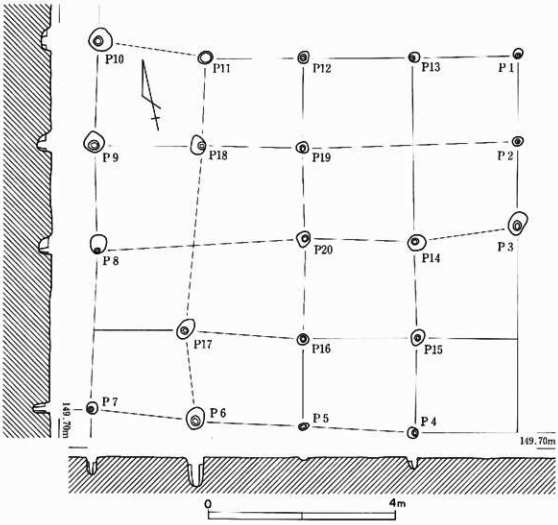
ＳＢ５３（図版135・156）

検出状況　Ⅳ区の北西、小微高地ｄの中央に位置する。密集する中世の掘立柱建物群Ａのなかでも北方に立地する建物である。規模および棟軸の方向が、重なり合うＳＢ52とほぼ同一であるため、先後関係が不明であるが、建て替えが行われたことを示している。古墳時代の溝ＳＤ92・ＳＤ96を切り、ＳＤ99・ＳＤ100・ＳＤ101・ＳＤ102とも切り合い関係をもつ。また、南東方向に近接してＳＥ09が営まれている。

形状・規模　Ｎ－13°－Ｅに棟軸の方向をとる桁行４間、梁行４間の建物である。規模は桁行方向が9.00m、梁行方向が7.90mである。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行方向が2.25m、梁行方向が1.97mを測る。なお、面積は71.10㎡である。

柱穴　20穴が確認され、柱筋の交点に柱穴の認められなかった部分が少なくない。柱穴の掘り方は円形であり、その直径は22～52cm、柱痕の直径は12～18cmである。深さは６～60cmを測る。

出土遺物　Ｐ６の柱痕より須恵器の椀・甕、黒色土器の椀、土師器の小片が、Ｐ７柱痕より須恵器・土師器の小片が、Ｐ９柱痕より須恵器の椀が、Ｐ10柱痕より須恵器の椀、土師器の小片が出土している。また、Ｐ17柱痕より、須恵器の椀、土師器の鍋が、同掘り方より須恵器の



第566図　ＳＢ53

甕、土師器の小片が出土した。

図化した土器（1342）は、P20柱痕より出土した須恵器である。底部はヘラ起こしである。

時期　出土土器から川除11期である。

第567図　ＳＢ53出土土器

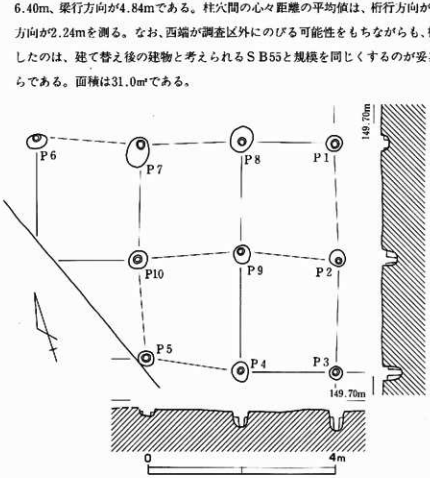
第218表　ＳＢ53出土土器観察表

番号	器種	法量（cm） 口径	器高	底径	頸径	最大径	指数	色調	現存状況	特徴・その他
1342	須恵器・椀	(13.9)	4.9	(6.2)	—	—	35	灰白	口縁部～底部1/3	底部ヘラ起こし　P20柱痕出土

ＳＢ５４（図版135）

検出状況　Ⅳ区の北西、小微高地ｄの中央に位置する。Ⅳ区中央に密集する中世の掘立柱建物群Ａとは柵（ＳＡ07）を隔てた西側に立地する。西側は調査区外に続く可能性がある。古墳時代のＳＨ77を切り、ＳＢ55と切り合っている。

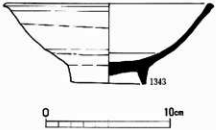
形状・規模　Ｎ－73°－Ｗに棟軸の方向をとる桁行３間、梁行２間の建物である。規模は桁行方向が6.40m、梁行方向が4.84mである。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行方向が2.13m、梁行方向が2.24mを測る。なお、西端が調査区外にのびる可能性をもちながらも、桁行を３間としたのは、建て替え後の建物と考えられるＳＢ55と規模を同じくするのが妥当と考えたからである。面積は31.0m²である。



第568図　ＳＢ54

柱穴　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は30～52cm、柱痕の直径は14～20cmである。深さは12～44cmを測る。

出土遺物　Ｐ８の掘り方より須恵器の椀・皿および白磁の碗、土師器の小片、青磁片が、Ｐ９の掘り方より須恵器の椀が出土している。



第569図　ＳＢ54出土土器

図化できたのはＰ８の掘り方より出土した白磁の碗１点のみであり、Ⅴ類に属する碗である。高台は細く高く、直立するものである。口縁部を外反させて、端部に水平に近い面を形成する。調整については体部下半にヘラケズリが認められる。

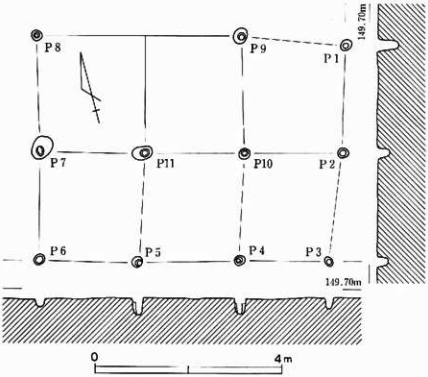
時期　出土土器および棟軸方向から、川除13期と考えられる。

第218表　ＳＢ54出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	厚径	最大径	個数	色調	残存状況	特徴・その他
1343	白磁・碗	16.4	6.5	5.5	—		39	明オリーブ灰	口縁部～体部4/5	体部下半から底部をヘラケズリ　P8掘り方出土

ＳＢ５５

検出状況　Ⅳ区の北西、小微高地ｄの中央に位置する。Ⅳ区中央に密集する中世の掘立柱建物群Ａとは柵（ＳＡ07）を隔てた西側に立地する。ＳＢ54と切り合っており、両者の規模、棟軸の方向の同一性などから建て替えたものと考えられる。



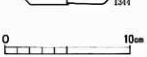
第570図　ＳＢ55

形状・規模　N－75°－Wに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行2間の建物である。規模は桁行方向が6.40m、梁行方向が4.56mである。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行方向が2.13m、梁行方向が2.28mを測る。面積は29.2㎡である。

柱穴　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は22～40cm、柱痕の直径は14～20cmである。深さは16～48cmを測る。

出土遺物　P2・P11柱痕埋土より土師器の小片が出土している。また、P1・4・5・10・11の掘り方より須恵器の椀・土師器の皿・甕、黒色土器の椀などが出土している。

1344はP10掘り方出土の土師器の皿である。底部は回転糸切りである。



第571図　ＳＢ55出土土器

時期　出土土器から川除12期と考えられる。

第220表　ＳＢ55出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	残存	色調	特徴・その他
1344	土師器・小皿	(9.6)	1.9	(5.6)	―	―	1/8	淡黄橙	2/3	底部回転糸切り　P10掘り方出土

ＳＢ５６（図版156）

検出状況　Ⅳ区の中央、小微高地dの中央やや南寄りに位置する。Ⅳ区中央に密集する中世の掘立柱建物群Aに位置する。ＳＤ92・ＳＤ96を切っており、またＳＢ61・ＳＤ103・ＳＤ104・ＳＤ105・ＳＤ113・ＳＤ138・ＳＤ140と切り合っている。ＳＢ54・ＳＢ55とこれら掘立柱建物群とを画する南北方向の柵（ＳＡ07）の南端の柱穴は、本遺構の最も南の柱筋の延長線上に位置している。

形状・規模　N－18°－Eに棟軸の方向をとる桁行5間、梁行3間の建物であり、庇が東辺に設置されている。

身舎の規模は桁行方向が13.40m、梁行方向が7.04mである。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行方向が2.68m、梁行方向が2.34mを測る。面積は94.3㎡である。

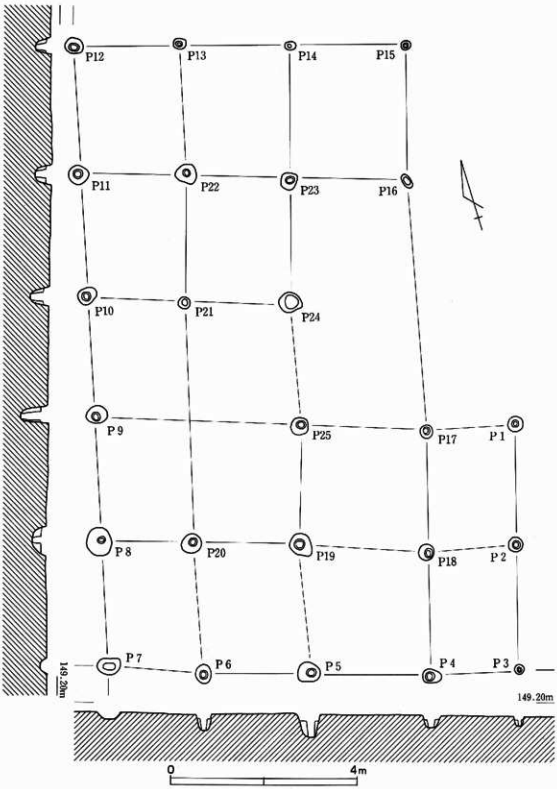
庇　ひずんだ長方形の身舎の南東には南端から北へ2間分の庇がつく。庇は身舎から2.00m離れている。柱穴間の距離はともに2.60mである。

柱穴　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は20～56cm、柱痕の直径は10～18cmである。深さは20～60cmを測る。

出土遺物　P1・2・4・5・7・10・11・14～18・21・23～25の柱痕埋土より須恵器の椀・甕、土師器の小皿・坏・椀・鍋・羽釜・甕、黒色土器の椀などが出土している。

また、P11・13・15の掘り方より、須恵器の椀・坏・甕、土師器の皿・鍋・甕などが出土している。

須恵器　図化した土器は6点である。1345はP15掘り方より出土した捏鉢で、使用による内面の磨滅が著しい。1346はP17柱痕埋土からの出土で底部には回転糸切りの痕跡が認められる。1347はP24柱痕埋土から出土した須恵器の椀である。体部下半外面には1条の沈線が巡っ

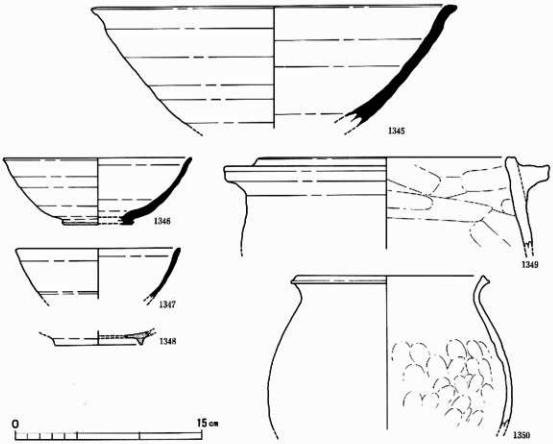


第572図　ＳＢ56

ている。

黒色土器　1348はＰ５柱痕埋土より出土した黒色土器Ａ類の椀である。貼付け高台の断面形は三角形である。

土師器　1349はＰ14柱痕埋土から出土した羽釜である。鍔の高さは2.6cmである。1350はＰ25掘り



第573図　ＳＢ56出土土器

方より出土した甕である。残存状況は不良であるが、体部内面にはユビオサエの痕跡が認められる。

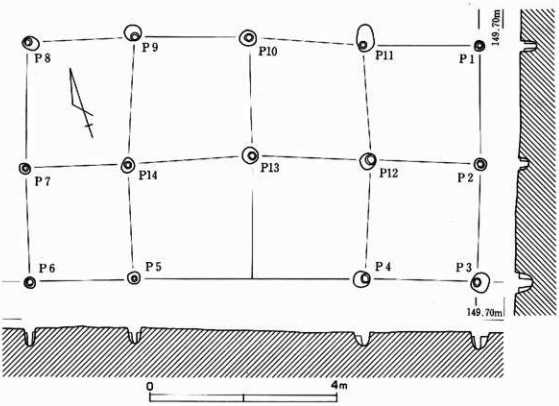
時期　　川除12期である。

第221表　ＳＢ56出土土器観察表

番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	頸径	最大径	指数	色調	残存状況	特徴・その他
1345	須恵器・浅鉢	(28.4)	残9.6	—	—	—	—	灰	口縁部1/8	P15堀り方出土
1346	須恵器・椀	(14.8)	5.3	(5.4)	—	—	35	明緑灰	1/2	底部周転糸切り　P17柱痕出土
1347	須恵器・甕	(13.0)	残4.0	—	—	—	—	灰	口縁部1/4	体部下半に沈線　P24柱痕出土
1348	黒色土器・椀	—	残1.1	(7.0)	—	—	—	灰白／オリーブ黒	底部1/5	P5柱痕出土
1349	土師器・甕か	(19.2)	残7.1	—	—	(26.8)	—	褐灰～橙	口縁部後か	P14柱痕出土
1350	土師器・甕	(15.4)	残12.1	—	(14.8)	(19.4)	—	明褐～にぶい橙	口縁部～体部併か	P25堀り方出土

ＳＢ５７（図版135）

検出状況　　Ⅳ区の中央、小徹高地ｄの中央やや南寄りに位置する。Ⅳ区中央に密集する中世の掘立柱建物群Ａに位置する。ＳＤ103・ＳＤ108を切っており、またＳＤ104と切り合っている。ＳＥ09は本遺構に近接した北西方向に位置している。



第574図　ＳＢ57

形状・規模　Ｎ－72°－Ｗに棟軸の方向をとる桁行４間、梁行２間の建物である。

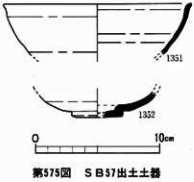
建物の規模は桁行方向が9.60m、梁行方向が5.04mである。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行方向が2.40m、梁行方向が2.52mを測る。面積は48.4m²である。

柱穴　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は20～36cm、柱痕の直径は14～18cmである。深さは22～36cmを測る。

出土遺物　Ｐ１～４・６・10・12・13の柱痕埋土より須恵器の椀・甕、土師器の小皿・坏・鍋・甕、黒色土器の椀などが出土している。

Ｐ５・８・11の掘り方からは須恵器の甕、土師器の皿・坏などが出土している。

須恵器　図化した土器は２点のみである。1351はＰ１柱痕、1352はＰ13柱痕より出土した須恵器の椀である。1352の底部外面には回転糸切りの痕跡が認められる。



第575図　ＳＢ57出土土器

時期　川除12期である。

第222表　ＳＢ57出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	脚径	最大径	胎厚	色調	残存状況	特徴・その他
1351	須恵器・椀	(15.0)	残4.0	—	—	—	—	灰白	1/9	P1柱痕出土
1352	須恵器・椀	—	残1.8	(4.0)	—	—	—	灰白	底部1/6・体部僅か	底部回転糸切り　P13柱痕出土

ＳＢ５８（図版135）

検出状況　Ⅳ区の中央、小微高地ｄの中央やや南寄りに位置する。Ⅳ区中央に密集する中世の掘立柱建物群Ａに位置する。ＳＤ107を切っており、またＳＢ57・ＳＢ59・ＳＢ60、ＳＸ03、ＳＤ104・ＳＤ105と切り合っている。

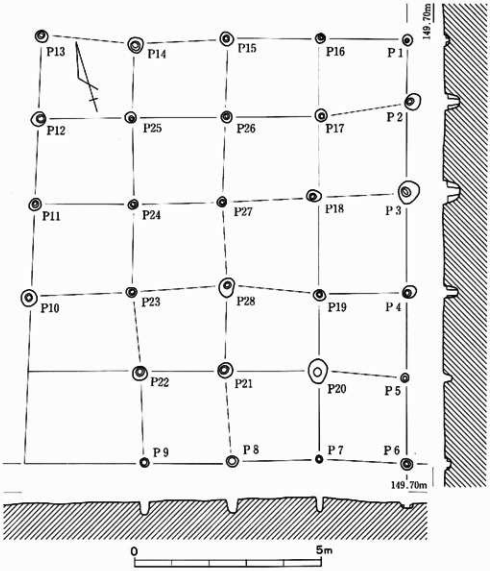
形状・規模　Ｎ－72°－Ｗに棟軸の方向をとる桁行５間、梁行４間の建物である。

建物の規模は桁行方向が11.10m、梁行方向が10.00mである。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行方向が2.20m、梁行方向が2.50mを測る。面積は111.0m²と大規模である。

柱穴　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は20～55cm、柱痕の直径は20～30cmである。深さは20～36cmを測る。

出土遺物　Ｐ３・５・８・11・15・16・18・21・23・24・28の柱痕埋土より、須恵器の皿・椀・甕、土師器の皿・甕、黒色土器の椀などが出土している。Ｐ５・16の掘り方より土師器の皿、須恵器の椀が出土している。いずれも小片のため、図化できたものはない。

時期　出土土器から川除12期と考えられる。



第576図　ＳＢ58

ＳＢ５９（図版 135）

検出状況　Ⅳ区の中央、小微高地ｄの中央やや南寄りに位置する。Ⅳ区中央に密集する中世の掘立柱建物群Ａに位置する。ＳＤ104と切り合っている。

形状・規模　Ｎ－73°－Ｗに棟軸の方向をとる桁行３間、梁行２間の建物である。

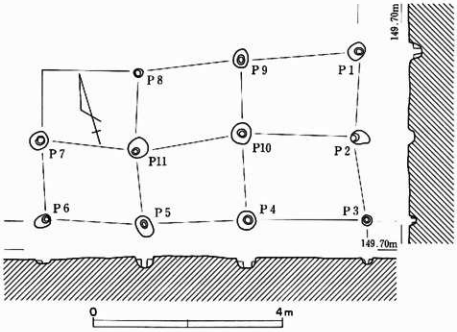
建物の規模は桁行方向が6.80m、梁行方向が3.40mであり、２：１の割合である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行方向が2.26m、梁行方向が1.70mを測る。面積は23.1㎡である。

柱穴　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は22～40cm、柱痕の直径は12～20cmである。深さは12～25cmを測る。

出土遺物　Ｐ４から須恵器の椀、土師器の小片、Ｐ５から土師器の鍋、Ｐ10から土師器の皿、Ｐ11から土師器の小片が出土している。いずれも柱痕埋土から出土したものである。

出土した土器はいずれも小片のため、図化できたものはない。

時期　出土土器から川除14期と考えられる。



第577図　ＳＢ59

ＳＢ６０（図版 135）

検出状況　Ⅳ区の中央、小微高地ｄの中央やや南寄りに位置する。Ⅳ区中央に密集する中世の掘立柱建物群Ａの南寄りに位置する。ＳＤ107を切り、ＳＢ58・ＳＢ59・ＳＤ105と切り合っている。

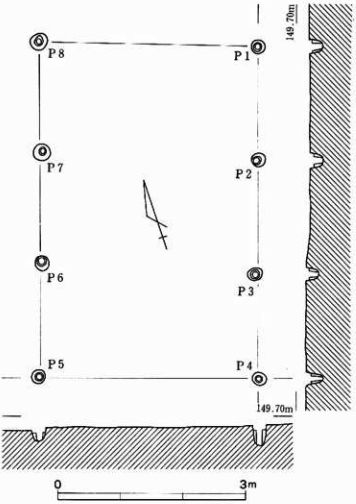
形状・規模　Ｎ－19°－Ｅに棟軸の方向をとる桁行３間、梁行１間の建物である。

建物の規模は桁行方向が7.00m、梁行方向が4.60mである。桁行方向の柱穴間の心々距離の平均値は2.33mを測る。面積は32.2㎡である。

柱穴　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は30～36cm、柱痕の直径は12～14cmである。深さは24～44cmを測る。

出土遺物　出土していない。

時期　遺物は認められなかったが、近接あるいは重複する多くの掘立柱建物群と方向を同じくすることから、これらと同一の時期、川除12期と思われる。



第578図　ＳＢ60

ＳＢ６１

検出状況　Ⅳ区の中央、小微高地ｄの中央やや南寄りに位置し、Ⅳ区中央に密集する中世の掘立柱建物群Ａの南寄りに立地している。ＳＤ105・ＳＸ03との切り合い関係をもつ。

形状・規模　Ｎ－74°－Ｗに棟軸の方向をとる桁行３間、梁行３間の建物である。建物の規模は桁行方向が7.76m、梁行方向が7.44mである。柱穴間の心々距離の平均値は桁行方向が2.59m、梁行方向が2.48mを測る。面積は57.7㎡である。

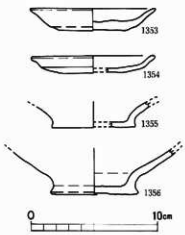
柱穴　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は16～50cm、柱痕の直径は14～20cmである。深さは20～44cmを測る。

出土遺物　多くの遺物が柱痕埋土から出土している。

Ｐ１・２・４～11・14より、須恵器の椀・甕、土師器の椀・皿・甕、黒色土器Ａ・Ｂ類の椀などが出土している。

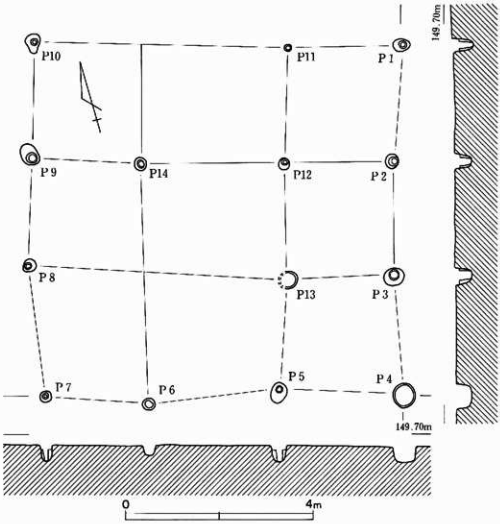
図化した土器は土師器の小皿２点、土師器の椀２点である。1353・1354・1355はいずれもＰ９の柱痕埋土より出土したもので、1356はＰ２の柱痕埋土より出土したものである。

小皿には、回転ナデ仕上げのものと、手捏ねによるものの二者が認められる。



第579図　ＳＢ61出土土器

時期　出土土器から川除13期と考えられる。



第580図　ＳＢ61

第223表　ＳＢ61出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	第径	最大径	指数	色調	残存状況	特徴・その他	
1353	土師器・小皿	(9.8)	1.7	8.6	—	—	17	淡黄	底部完存・口縁部欠か	底部回転糸切り・焼成不良	P3付近出土
1354	土師器・小皿	(9.6)	1.3	(7.4)	—	—	13	橙～黒	1/6	底部手捏ね	P3付近出土
1355	土師器・椀	—	現2.0	(6.6)	—	—	—	にぶい橙	底部1/5	底部回転糸切り	P3付近出土
1356	土師器・椀	—	現3.6	7.0	—		—	灰白	底部完存・体部欠か		P2付近出土

ＳＢ６２

検出状況　Ⅳ区の中央、小微高地ｄの中央やや南寄りに位置し、Ⅳ区中央に密集する中世の掘立柱建物群Ａの最も南に立地している。ＳＤ106・ＳＤ111との切り合い関係をもつ。

形状・規模　Ｎ－24°－Ｅに棟軸の方向をとる桁行２間、梁行２間の建物である。

建物の規模は桁行方向が4.28m、梁行方向が4.24mである。柱穴間の心々距離の平均値は桁行方向が2.14m、梁行方向が2.12mを測る。面積は18.1m²である。

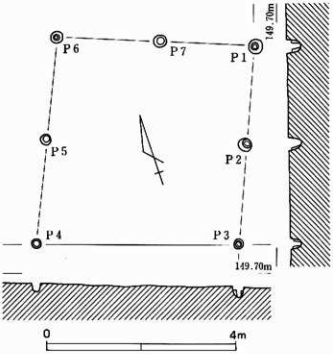
柱穴　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は20～30cm、柱痕の直径は12～14cmである。深さ

は18～30cmを測る。

出土遺物　土器が柱痕埋土から出土しているが、小片が多く図化できるものはない。

Ｐ１から須恵器の椀、土師器の皿、Ｐ５から土師器の皿・鍋、Ｐ６より土師器の小片、Ｐ７から須恵器の椀、土師器の小片が出土している。

時期　出土土器から、川除14期と考えられる。



第581図　ＳＢ62

ＳＢ６３（図版135・156）

検出状況　Ⅳ区の中央西寄り、小微高地ｄの中央に位置する。Ⅳ区中央に密集する中世の掘立柱建物群Ａのやや西にあり、これらとは棟軸の方向を異にする。ＳＤ92・96・112を切っており、建物の西北隅は調査区外である。

形状・規模　Ｎ－10°－Ｅに棟軸の方向をとる桁行６間、梁行４間の建物である。

建物の規模は桁行方向が14.8m、梁行方向が9.12mである。柱穴間の心々距離の平均値は桁行方向が2.47m、梁行方向が2.28mを測る。面積は134.98㎡である。

柱穴　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は25～40cm、柱痕の直径は14～20cmである。深さは４～55cmを測る。

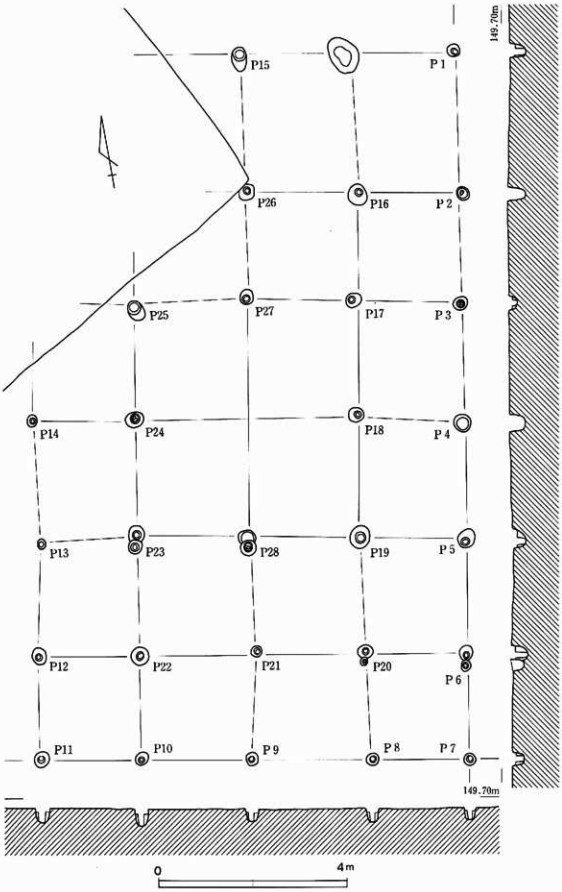
出土遺物　Ｐ２・６・８・９・13・17～23・26の柱痕埋土からは、須恵器の椀・甕、土師器の小皿・大皿・坏・甕・鍋、黒色土器の椀が出土している。

Ｐ４・９・16・18・19掘り方から須恵器の椀・甕、土師器の托、瓦器の椀が出土している。

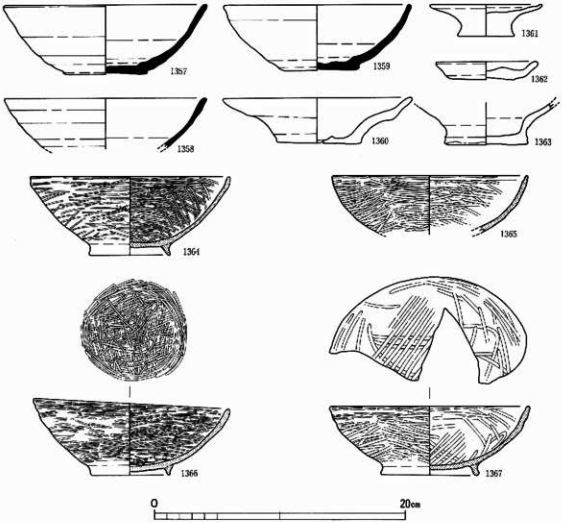
Ｐ４　Ｐ４では柱痕が認められず、柱を抜いた後に10数点の土器をおさめる状況が確認された。

出土した土器には、須恵器の椀、土師器の坏・托・

第582図　ＳＢ63　Ｐ４


149.70m
P15
P1
P26
P16
P2
P25
P27
P17
P3
P14
P24
P18
P4
P13
P23
P28
P19
P5
P12
P22
P21
P20
P6
P11
P10
P9
P8
P7
149.70m
0
4m

第583図　ＳＢ63



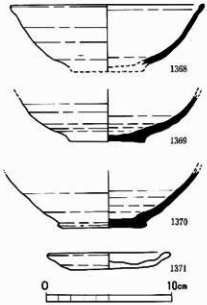
第584図　ＳＢ63　Ｐ４出土土器

小皿・椀、瓦器の椀がある。

土師器はいずれも底部に回転糸切りの痕跡がある。瓦器椀は、内外面には密なヘラミガキが施されるものばかりであり、高台の断面形は三角形のもの、丸くおさめるものが認められる。

この他に図化した土器は４点あり、須恵器の椀３点と土師器の小皿１点である。1368・1370はＰ９掘り方埋土より出土したもので、1369はＰ13柱痕埋土より、1371はＰ25柱痕埋土より出土している。1369・1370・1371の底部外面には回転糸切りの痕跡が認められる。

時期　出土土器から川除13期と考えられる。



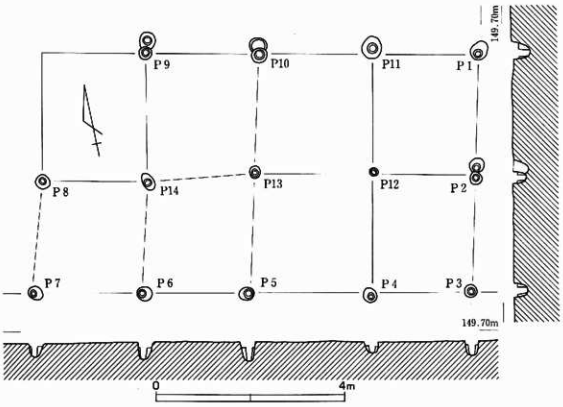
第585図　ＳＢ63出土土器

第224表　ＳＢ63出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	厚さ	最大径	指数	色調	残存状況	特徴・その他	
1357	須恵器・鉢	16.0	5.5	(6.2)	—	—	34	灰白	口縁部1/4・底部1/2		P4出土
1358	須恵器・鉢	(16.0)	残3.9	—	—	—	—	灰白	口縁部1/8	内外面に墨付着	P4出土
1359	須恵器・鉢	14.6	5.2	6.3	—	—	35	灰	完存	内底上半部に集状もの付着	P4出土
1360	土師器・坏	(15.0)	3.6	6.5	—	—	24	灰白～淡黄橙	4/5	底部回転糸切り	P4出土
1361	土師器・皿	8.9	2.5	4.4	—	—	28	淡黄橙	口縁部2/3・底部完存	底部回転糸切り	P4出土
1362	土師器・小皿	(7.9)	1.4	4.9	—	—	17	灰白	口縁部2/3・底部完存	底部回転糸切り	P4出土
1363	土師器・鉢	—	残3.2	(6.6)	—	—	—	灰白～にぶい橙	体部僅か・底部完存	底部回転糸切り？	P4出土
1364	瓦器・椀	(15.5)	6.2	(6.4)	—	—	40	オリーブ黒	体部1/3・底部完存	内外面とも横方向の密なヘラミガキ	P4出土
1365	瓦器・椀	(15.4)	残4.8	—	—		—	灰	口縁部1/4		P4出土
1366	瓦器・椀	15.5	6.2	6.2	—	—	40	暗灰	口縁部3/4	内外面とも横方向の密なヘラミガキ	P4出土
1367	瓦器・椀	(15.6)	5.4	(7.6)	—	—	34	灰	2/3		P4出土
1368	須恵器・鉢	(15.0)	残5.9	—	—	—	—	灰白～灰	口縁部3/4	1～4mm大の礫含む	P9明り方出土
1369	須恵器・鉢	—	残3.6	6.0	—	—	—	灰白	底部完存	1～4mm大の礫含む・粒土が異なる	P13柱痕出土
1370	瓦器・椀	—	残4.5	(7.1)	—			灰白	底部4/5完存	1～5mm大の礫含む	P9明り方出土
1371	土師器・小皿	9.3	1.3	6.5	—	—	13	灰白～淡黄橙	ほぼ完存	底部糸切り	P25柱痕出土

ＳＢ６４

検出状況　Ⅳ区の中央西寄り、小微高地ｄの中央に位置する。ＳＢ63の南方２間にほぼ重複して存在する。ＳＤ92・96・112を切っている。



第580図　ＳＢ64

形状・規模　N－80°－Wに棟軸の方向をとる桁行4間、梁行2間の建物である。

建物の規模は桁行方向が9.13m、梁行方向が5.00mである。柱穴間の心々距離の平均値は桁行方向が2.28m、梁行方向が2.50mを測る。面積は45.65㎡である。

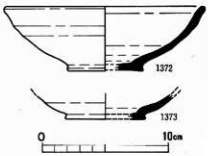
柱穴　柱穴の掘り方は円形であり、その直径は27～40cm、柱痕の直径は12～20cmである。深さは30～87cmを測る。

出土遺物　P2・5・11・12・14の柱痕埋土からは須恵器の椀、土師器の坏などが出土している。

P12・13の掘り方からは須恵器の椀、土師器の托などが出土している。

図化した土器は須恵器の椀2点のみであり、P5掘り方およびP14の掘り方より出土したものである。底部はともに回転糸切りである。

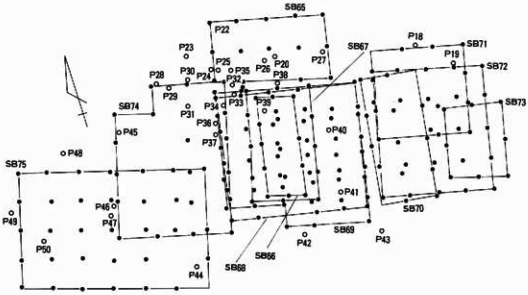
時期　出土土器から川除12期と考えられる。



第587図　ＳＢ64出土土器

第225表　ＳＢ64出土土器観察表

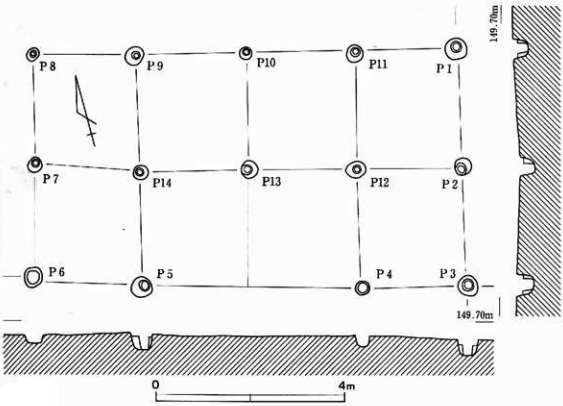
番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	胴径	最大径	指数	色調	残存状況	特徴・その他
1372	須恵器・椀	(15.4)	5.1	(5.9)	—	—	33	灰白～灰	1/4	器壁が全体的に厚い　P5掘り方出土
1373	須恵器・椀	—	残2.0	(6.2)	—	—	—	灰	1/7	P14掘り方出土



第588図　掘立柱建物群Ｂ

ＳＢ６５（図版136・156）

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの北側に位置する。



第589図　SB65

形状・規模　N－76°－Wに棟軸の方向をとる桁行4間、梁行2間の総柱の掘立柱建物である。規模は桁行方向で9.08m、梁行方向で4.84mを測る。面積は43.9㎡である。柱穴間の心々距離の平均は、桁行で2.27m、梁行で2.42mである。

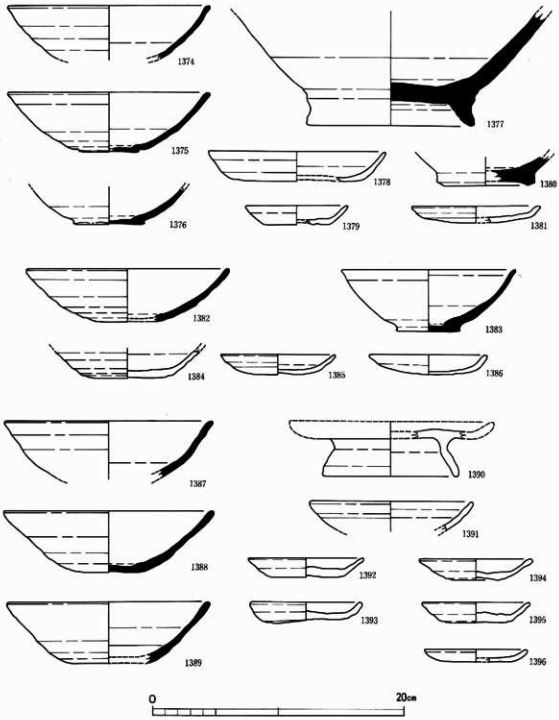
柱穴　南側桁行中央の柱穴を欠くが、他はすべて検出できた。掘り方の径は、24～44cmを測り、検出面からの深さは20～38cmである。また、柱の抜取り痕の径は16～24cmを測る。柱穴内においては、礎板・詰石などは検出されなかった。

出土遺物　各柱穴から出土しているが、これらの遺物は各柱穴において大きく3つの単位に分かれて出土している。ひとつは柱穴掘り方内から出土した遺物で、柱を建てる上限を示す資料である。二つめは、柱を抜取った後に混入した遺物で、建物の下限を示す資料である。最後は、柱を抜取りその穴が埋没後、整地により堆積した遺物で、建物の下限を補強する資料である。

整地層　まず建物廃絶後の整地に伴う遺物としては、P3・P5を中心に須恵器・土師器・白磁が出土している。

須恵器　椀・小皿・捏鉢・甕が出土しているが、図化できたのは椀と捏鉢に限られる。椀は、体部が内湾気味にたちあがり口縁端部をわずかに外反させ、内面見込みには段をもつ点が特徴として指摘できる。底部の切離しは、いずれも糸切りによっている。捏鉢は、底部に高台を貼りつけるタイプの土器である。

土師器　大皿・小皿が出土している。大皿は、口縁部を弱い2段の横ナデによって仕上げられ、底部は手捏ねによって成形されている。小皿は、全体を回転ナデによって仕上げられており、底部は糸切りによって切り離されている。



第590図　ＳＢ85出土土器

白磁　Ⅳ類碗に分類されるタイプの底部である。

柱穴内　須恵器・土師器・瓦器が出土しているが、図化できたのは須恵器と土師器である。

須恵器　椀・小皿が出土しているが、小皿は図化できなかった。椀は、底部内面に明確な段をもたないタイプ（1382）と段をもつより古いタイプ（1383）が出土している。いずれも底部は糸切りにより切り離されている。

土師器　大皿・小皿・坏・甕が出土しているが、図化できたのは坏と小皿である。坏は底部と体部の一部のみの残存であるが、比較的精良な胎土である。底部の切り離しは糸切りによっ

ている。小皿は、口縁部を2段のナデ調整によるものと、1段のナデ調整によるものとの2タイプが出土している。いずれも底部は手捏ねにより成形されている。

瓦器　椀が出土している。

搬り方内　須恵器・土師器・瓦器が出土しているが、図化できたのは須恵器と土師器である。

須恵器　椀・小皿・甕が出土しているが、図化できたのは椀に限られる。1387は体部が内湾気味に立ち上がるが、1388・1389についてはほぼ直線的にのび、より新しい傾向を示している。

土師器　大皿・小皿・托・甕が出土しているが、甕については図化できなかった。托は、高台部分しか残存していないが、高台高3.1cm、高台径10.6cmと大型である。横方向のナデ調整によって仕上げられているが、ロクロは用いられていない。

大皿は、口縁部から体部にかけての残存であるが、口縁部は2段のナデ調整により仕上げられている。

小皿は、底部を回転糸切りにより切り離すもの（1392・1394・1395）と手捏ねにより成形するもの（1393・1396）の2タイプに分類できる。前者は全体を回転ナデにより仕上げられているが、後者については口縁部のみを1段ないし2段の横方向のナデ調整により仕上げられている。

瓦器　椀が出土している。

時期　遺物が多く出土しており、出土遺物から時期を判断することができる。理論的には、掘り方内出土遺物が建物の上限を示し、柱痕内出土遺物および整地層出土遺物が下限を示すものである。しかし本建物にともなう遺物をみると、個々の遺物間では若干の時期差を認めることができるが、出土単位間では明確な差を認めることは困難である。

以上のことから、本建物の存続期間は、土器様式の差で示すことのできるような長期間ではなく、比較的短期間であったものと考えられる。そして、その時期は川除13期と考えられる。

第226表　SB65出土土器観察表（1）

番号	器種	法量（cm） 口径	器高	底径	胴径	最大径	指数	色調	残存状況	特徴・その他	
1374	須恵器・椀	(16.0)	残4.2	—	—	—	—	灰	口縁部1/8		P3整地層出土
1375	須恵器・椀	(16.0)	4.7	(4.8)	—	—	29	灰	口縁部欠か・底部1/3	精巧な仕上げ	P5整地層出土
1376	須恵器・椀	—	残2.7	5.4	—	—	—	灰白	底部完存・体部薄か		P3整地層出土
1377	須恵器・鉢か	—	残8.9	(13.0)	—	—	—	灰白	底部1/2	底部内面に平底・外面に同心円文	P3整地層出土
1378	土師器・大皿	(34.0)	2.4	(10.4)	—	—	17	灰白	口縁部1/6・底部既か	底部手捏ね	P3整地層出土
1379	土師器・小皿	(8.0)	1.6	(5.6)	—	—	20	にぶい橙	1/4	底部糸切り	P5整地層出土
1380	白磁・椀	—	残2.1	(7.8)	—	—	—	灰白	底部1/4・体部薄か	内面に釉付着	P3整地層出土
1381	土師器・小皿	(16.0)	1.3		—	—	13	浅黄橙	口縁部～底部1/5		P3整地層出土
1382	須恵器・椀	(16.0)	4.2	(4.2)	—	—	26	灰白	口縁部1/3		P12柱痕出土
1383	須恵器・椀	(13.6)	4.9	(5.0)	—	—	36	灰白	1/2	底部糸切り	P34柱痕出土
1384	土師器・椀	—	残2.2	6.0	—	—	—	灰白～淡黄	底部完存・体部落か		P24柱痕出土
1385	土師器・小皿	(9.0)	1.6			—	17	灰白	1/4	精良に近い胎土	P14柱痕出土
1386	土師器・小皿	(9.2)	1.6		—	—	17	浅黄橙	3/4		P9柱痕出土

第227表　ＳＢ65出土土器観察表（２）

番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	脚径	最大径	個数	色調	残存状況	特徴・その他
1387	須恵器・椀	(16.4)	残4.5	—	—	—	—	灰白	1/7	外面に墨痕あり　P5堀り方出土
1388	須恵器・椀	16.6	4.8	6.0	—	—	28	灰白	底部1/2・口縁部強か	内面に焼け付着　P9堀り方出土
1389	須恵器・椀	(16.0)	4.8	5.8	—	—	30	灰白	1/4	内面に焼け付着　P14堀り方出土
1390	土師器・台付鉢	—	残3.7	(10.6)	—	—	—	浅黄橙	底部1/3	P5堀り方出土
1391	土師器・火鉢	(13.0)	残2.4	—	—	—	—	にぶい橙	口縁部1/9	P5堀り方出土
1392	土師器・小皿	9.1	1.5	5.5	—	—	16	浅黄橙	2/3	底部糸切り・1mm大の砂粒多く含む　P5堀り方出土
1393	土師器・小皿	8.6	1.6	5.6	—	—	18	灰白	ほぼ完存	P7堀り方出土
1394	土師器・小皿	(8.6)	1.7	(4.8)	—	—	19	橙黄	1/3	底部糸切り　P5堀り方出土
1395	土師器・小皿	(8.4)	1.6	(4.8)	—	—	19	浅黄橙	1/3	底部糸切り　P5堀り方出土
1396	土師器・小皿	(8.8)	1.6	5.0	—	—	12	浅黄橙	口縁部～体部1/6	胎土に黒い粒土　P14堀り方出土

ＳＢ６６（図版136・157）

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂのほぼ中央部に位置する。

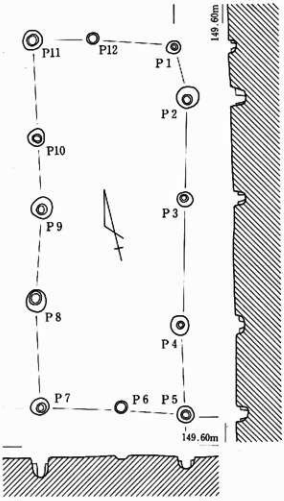
形状・規模　Ｎ－13°－Ｅに棟軸の方向をとる、桁行４間、梁行２間の掘立柱建物である。規模は、桁行方向で7.76m、梁行方向で3.04mを測る。面積は23.6㎡である。柱穴間の距離はあまり一定していないが、その心々距離の平均は、桁行で1.94m、梁行で1.52mである。

柱穴　計12穴検出しているが、その規模の差は比較的顕著である。掘り方の径は28cm～48cmを測り、検出面からの深さは８～40cmである。柱の抜取り穴の径は14cm～22cmである。各柱穴とも、礎板・礎詰などの柱の補強は認められなかった。

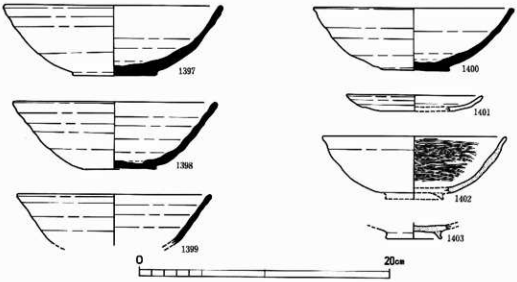
出土遺物　柱穴掘り方内と柱抜取り穴内から出土している。

掘り方内　掘り方内からは須恵器・土師器が出土しているが、図化できたのは須恵器に限られる。

須恵器　椀と小皿が出土しているが、小皿は小片のため図化できなかった。椀は、内湾気味に立ち上がる体部と明



第591図　ＳＢ66



第592図　ＳＢ66出土土器

瞭な平高台を有する点が特徴として指摘できる。ただし、高台高は低く、平高台が消滅する直前のものと考えられる。また、内面見込みはわずかに段をなしている。

土師器　器種の特定できるのは小皿のみである。

柱痕内　須恵器・土師器・瓦器・黒色土器が出土している。

須恵器　椀・小皿・甕が出土している。いずれも小片で図化できなかった。

土師器　小皿が出土している。1401は、口縁部を２段のナデ調整により仕上げている。底部は、手捏ねにより成形されている。

瓦　器　椀が出土している。1402は口縁部を横方向のナデ調整により仕上げられている。内面は、丁寧な暗文が施されている。外面については磨滅が著しく、暗文の有無の判断が困難である。ユビオサエによる指頭圧痕が顕著である。

黒色土器　底部のみの残存である。高台は断面逆三角形を呈し、外方にふんばっている。高台高0.5cmと比較的しっかりしている。

時期　掘り方内出土土器と柱痕内出土土器とでは、明確に時期差を指摘することは困難である。したがって、本建物は比較的短期間の存続であったものと考えられる。柱穴内出土遺物から判断すると、川除13期と考えられる。

第228表　ＳＢ66出土土器観察表

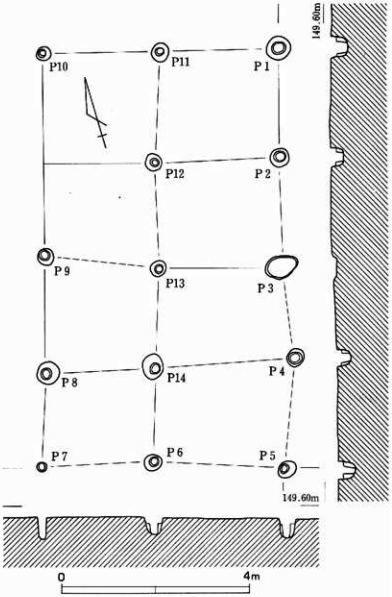
番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	脚径	最大径	総数	色調	残存状況	特徴・その他	
1397	須恵器・椀	17.1	5.6	6.3	—	—	32	灰白	完存	粘土精良	P48掘り方出土
1398	須恵器・椀	16.1	5.4	5.8	—	—	33	灰白	3/4		P16掘り方出土
1399	須恵器・椀	(15.4)	残4.0	—	—	—	—	灰	口縁部1/5		P16掘り方出土
1400	須恵器・椀	15.8	5.0	5.1	—	—	31	灰	ほぼ完存	全体的に砂粒多く含む	P16掘り方出土
1401	土師器・小皿	(10.0)	1.3	5.2	—	—	12	橙	口縁部1/7	全体的にゆがんでいる	P11柱痕出土
1402	瓦器・椀	(14.6)	残4.5	—	—	—	—	灰～灰白	1/3	内面に暗文あり・外面は磨滅の為不明	P11柱痕出土
1403	瓦器・椀	—	残1.2	4.4	—	—	—	灰白	底部完存	焼成不良	P11柱痕出土

ＳＢ６７

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂのほぼ中央に位置する。ＳＢ66と重複した位置にあたり、方位も一致している。

形状・規模　Ｎ－16°－Ｅに棟軸の方向をとる桁行４間、梁行２間の総柱の掘立柱建物である。規模は桁行8.72m、梁行5.08mを測る。面積は44.3㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行で2.18m、梁行で2.54mである。

柱穴　西側の桁行Ｐ９とＰ10の間で１穴を欠き、東側桁行Ｐ３はわずかな落ち込みしか確認できなかった。このため、柱穴として検出したのは13穴である。



第593図　ＳＢ67

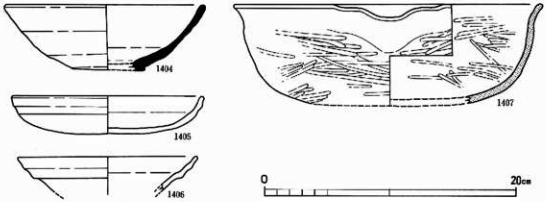
掘り方の径は、32～48cmを測り、検出面からの深さは８～40cmである。また、柱の抜取り穴の径は16～24cmである。

なお、Ｐ８・９においては、掘り方内に礫を詰め、柱を補強したようで、柱の抜取り穴を囲むように、拳大の礫が確認されている。

出土遺物　掘り方内、柱抜取り穴内、柱抜取り後の整地層から出土している。ただし全体的に遺物の出土は少ない。

整地層　柱抜取り後の整地層はＰ２で確認されたのみで、須恵器と土師器が出土しているが、いずれも小片のため図化できるものはなかった。須恵器は、椀・小皿・捏鉢が出土している。また土師器は、小皿が出土している。

抜取り穴　須恵器・土師器・瓦器が出土している。図化できたのは土師器のみである。須恵器は、



第594図　ＳＢ67出土土器

椀・小皿・捏鉢が出土している。土師器は、図化した大皿の他に小皿・甕が出土している。瓦器は、椀が出土している。

掘り方内　須恵器・土師器・瓦器が出土している。

椀・小皿・捏鉢・甕が出土しているが、図化できたのは椀のみである。椀は須恵器、内面見込みに段をもつもので、休部から口縁部にかけては内湾気味にたちあがっている。底部は回転糸切りによって切り離されている。

土師器　大皿・小皿・甕が出土しているが、図化できたのは大皿のみである。大皿は口縁部を２段にわたる横方向のナデ調整により仕上げている。

瓦器　Ｐ７より片口の鉢が出土している。残存率がわずかのため、正確な数値ではないが、口径24.4cmと大型品である。内外面とも比較的丁寧に暗文を施している。ただし、このような器形は管見の限り類例をみないものである。

時期　掘り方内・柱抜取り穴内・整地層から出土しているが、それぞれの上器の間に顕著な時期差を認めることは困難である。したがって、本掘立柱建物の存続は比較的短期間であったと考えられる。そして、出土土器から判断して、その時期は川除13期と考えられる。

第229表　ＳＢ67出土土器観察表

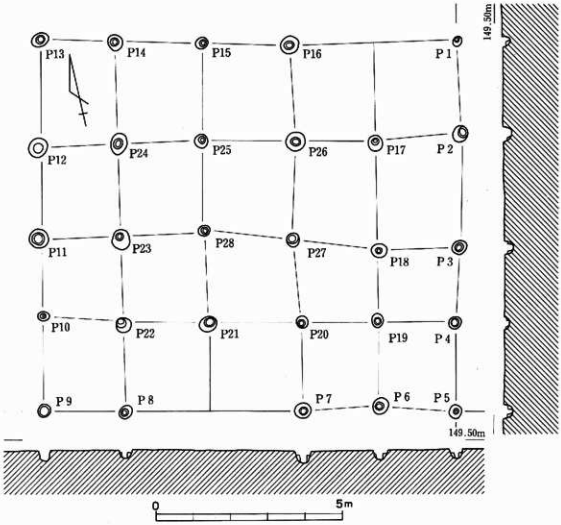
番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	脚径	最大径	指数	色調	残存状況	特徴・その他
1404	須恵器・椀	15.7	5.2	(5.8)	—	—	33	灰白～灰	2/3	1～4mm大の礫含む　P5掘り方出土
1405	土師器・大皿	14.0	3.0		—	—	21	淡黄橙	1/2	P1掘り方出土
1406	土師器・大皿	(14.2)	3.8	—	—	—	26	にぶい橙	1/5	2段の横方向のナデ　P10掘り方出土
1407	瓦器・鉢	(24.4)	残7.7	—		—	—	灰～灰白	1/6	内外面に暗文あり　P7掘り方出土

ＳＢ６８（図版136・157）

検出状況　Ⅳ区中央部南側の掘立柱建物群Ｂのほぼ中央部に位置する。

形状・規模　Ｎ－79°－Ｗに棟軸の方向をとる、桁行５間、梁行４間と大型の総柱の掘立柱建物である。規模は、桁行方向で11.1m、梁行方向で7.8mを測り、面積は86.6㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行方向で2.20m、梁行方向で1.90mである。

柱穴　桁行北側のＰ16とＰ１の間と桁行南側のＰ７とＰ８の間の２穴を欠く、28穴を検出した。



第595図　ＳＢ68

掘り方の径は25～50cmを測り、検出面からの深さは15～25cmである。また、柱の抜取り穴の径は15～25cmである。

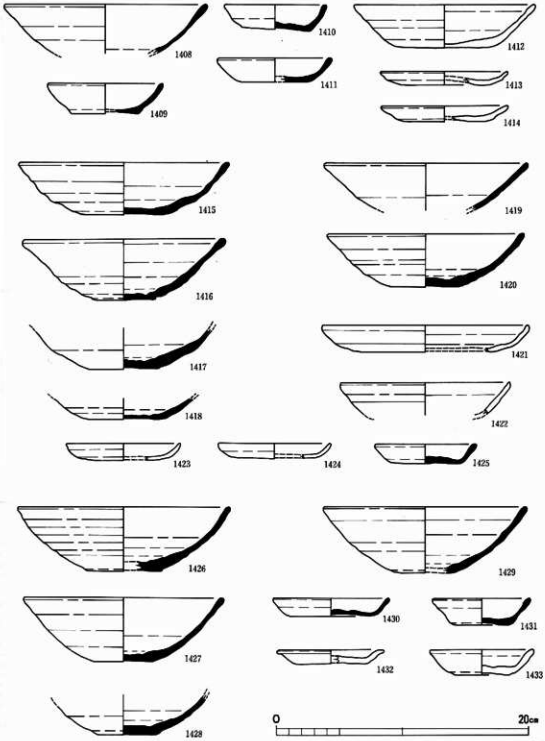
なお、柱穴内において、礎板・礎詰などの補強は確認されなかった。

出土遺物　柱抜取り後の整地層・柱抜取り穴内・掘り方内から出土している。建物の規模も大きく柱の数も多いこともあり、遺物の出土量も他の建物に比べて多く出土している。

整地層　柱抜取り後の整地層からは、須恵器・土師器・瓦器が出土しているが、瓦器については小片のため図化できなかった。

須恵器　椀・小皿・甕が出土している。椀は口縁部のみしか残存していないが、おそらく1415ないし1420と同じ形態になるものと推定される。小皿は、図化した３個体とも同じタイプで、口縁部は内湾気味にたちあがり、端部は肥厚している。底部は回転糸切りによって切り離されている。

土師器　大皿・小皿・坏が出土しているが、大皿は図化できなかった。坏は、内外面ともロクロによるナデ調整により仕上げられている。底部は回転糸切りにより切り離されている。小皿は、いずれも口縁部を２段のナデ調整により仕上げている。底部は手捏ねにより成形されている。



第596図　SB68出土土器

瓦器　椀が出土しているが小片のため図化できなかった。

抜取り穴　須恵器・土師器・白磁が出土している。

須恵器　椀・小皿が出土している。

椀は、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる点は共通しているが、底部の形態において若干異なる。ひとつは内面見込みにわずかに段をもつもの（1416）で、もう一つは段をもたないもの（1415・1417・1418・1420）である。いずれも、底部は糸切りにより

切り離されている。小皿は、整地層出土のものと同じタイプのものである。

土師器　大皿・小皿・鍋・甕が出土しているが、図化できたのは大皿と小皿である。図化した2つの大皿は、いずれも口縁部を2段のナデ調整により仕上げるものである。小皿も、図化した2個体とも口縁部を2段のナデ調整により仕上げるものである。底部は手捏ねによって成形している。

白磁　Ⅳ類に分類される碗が出土している。

掘り方　須恵器・土師器・白磁が出土している。

須恵器　椀・小皿・甕が出土しているが、甕は小片のため図化できなかった。椀は、整地層・柱抜取り穴出土の椀に比べて体部の内湾が顕著である。ただし内面見込みの段は認められない。小皿は、器高に比べて口径の大きい器高指数の低いものと、高いものの2タイプが認められる。

土師器　大皿・小皿・甕・羽釜が出土しているが、図化できたのは小皿のみである。図化した2個体とも内外面を回転ナデにより仕上げるものである。底部も回転糸切りにより切り離されている。須恵器・小皿同様、器高指数の高いものと低いものの2タイプが認められる。

時期　整地層・柱抜取り穴内・掘り方内から出土しており、前2者が本建物の下限を後者が上限を示すものであるが、出土遺物から判断して顕著な差を認めることは困難である。したがって、本建物の存続は比較的短期間であったと判断され、その時期は出土遺物から川除13期と考えられる。

第230表　ＳＢ68出土土器観察表（1）

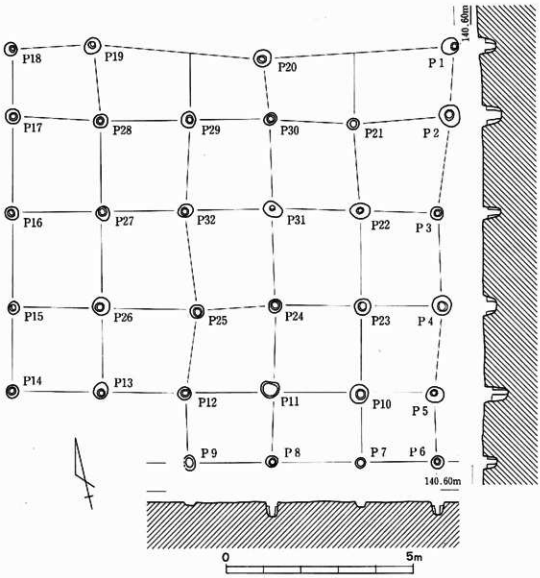
番号	器種	法量（cm） 口径	器高	底径	脚径	早入径	指数	色調	残存状況	特徴・その他	
1408	須恵器・椀	(16.6)	残3.8	—	—	—	—	灰	口縁部1/5	全体的に器壁が薄い	P24整地層出土
1409	須恵器・小Ⅱ	(9.0)	2.4	(5.4)	—	—	26	灰白	1/4		P24整地層出土
1410	須恵器・小Ⅱ	7.8	2.1	5.4	—	—	26	明黄灰	完存		P2整地層出土
1411	須恵器・小Ⅱ	(9.2)	1.6	(6.0)	—	—	17	灰白	口縁部1/4		P13整地層出土
1412	土師器・坏	(14.2)	3.4	7.4	—	—	23	淡黄橙	1/4	底部回転糸切り	P24整地層出土
1413	土師器・小Ⅱ	(10.0)	1.1	(6.0)	—	—	11	にぶい黄橙	口縁部1/6	輪貢に近い粘土	P24整地層出土
1414	土師器・小Ⅱ	(10.0)	1.2	(6.0)	—	—	12	灰白	1/8	輪貢に近い粘土	P24整地層出土
1415	須恵器・椀	(16.4)	4.1	(6.8)	—	—	25	灰白	1/3		P2柱痕出土
1416	須恵器・椀	15.7	5.8	5.1	—	—	36	灰	完存	1～5㎜大の礫含む	P22柱痕出土
1417	須恵器・椀	—	残3.0	(5.4)	—	—	—	灰白	底部～体部後か	焼成不良	P2柱痕出土
1418	須恵器・椀	—	残1.6	(6.0)	—	—	—	灰	底部1/4・体部後か		P2柱痕出土
1419	須恵器・椀	(16.0)	残4.2	—	—	—	—	灰白	1/6		P15柱痕出土
1420	須恵器・椀	15.4	4.2	5.6	—	—	27	灰	2/3		P2柱痕出土
1421	土師器・大Ⅱ	(16.2)	2.1	16.8	—	—	12	灰白	口縁部1/6		P9柱痕出土
1422	土師器・小Ⅱ	(13.4)	残2.5	—	—	—	—	にぶい黄橙	口縁部1/6	口縁部2段の横ナデ	P2柱痕出土
1423	土師器・小Ⅱ	9.0	1.3	(4.8)	—	—	14	灰白～にぶい橙	口縁部1/2	底部内面煤付着・輪貢に近い粘土	P2柱痕出土
1424	土師器・小Ⅱ	(8.9)	1.2	7.2	—	—	13	灰白～赤橙	口縁部1/3		P2柱痕出土
1425	須恵器・小Ⅱ	7.8	1.5	5.6	—	—	20	灰	完存		P22柱痕出土
1426	須恵器・椀	(16.8)	5.5	(6.2)	—	—	32	灰白	口縁部欠か・底部1/3	焼成不良	P13掘り方出土

第231表　ＳＢ68出土土器観察表（２）

番号	器種	法量（cm） 口径	器高	底径	頸径	最大径	胎土	色調	残存状況	特徴・その他
1427	縄文器・鉢	(15.8)	5.6	(4.8)	―	―	31	明茶灰	1/5	P12編り方出土
1428	縄文器・鉢	―	残2.8	(5.1)	―	―	―	灰白	底部完存・体部残か	P26編り方出土
1429	縄文器・鉢	(16.0)	5.2	(5.0)	―	―	32	灰白	1/6	P11編り方出土
1430	縄文器・小鉢	(9.2)	1.4	(6.2)	―	―	15	灰白	1/6	P12編り方出土
1431	縄文器・小鉢	(7.6)	2.1	(4.6)	―	―	27	灰白	底部完存・口縁部1/2	口縁部は歪んでいる　P24編り方出土
1432	土師器・小鉢	(7.8)	1.3	(5.8)	―	―	16	浅黄橙	1/4	底部糸切り　P12編り方出土
1433	土師器・小鉢	(8.2)	2.0	(4.4)	―	―	24	浅黄橙	1/3	底部糸切り　P17編り方出土

ＳＢ６９（図版136・157）

検出状況　　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの中央部に位置する。ＳＢ68とほとんどが重複してい



第507図　ＳＢ69

る。ＳＤ121に囲まれた屋敷地を構成する建物と考えられる。

形状・規模　Ｎ－78°－Ｗに棟軸の方向をとる、桁行５間、梁行５間の総柱の掘立柱建物である。ただし、南側桁行の西側２穴は柱穴が確認できなかったため、本建物の南側１間×３間が飛び出す形態をとなっている。柱穴は比較的規則的に並んでいるが、東側梁行については柱並びの乱れが顕著である。

規模は、桁行11.47m、梁行9.00mを測り、面積は103.2㎡である。柱穴間の心々間距離の平均値は、桁行で2.29m、梁行（南側の１間分を除く）で2.30mである。なお、南側に飛び出した部分の梁行の柱穴間距離が1.80mと他の梁行の平均柱間距離より短いため、この部分は庇となる可能性も考えられる。

柱穴　北側桁行のＰ19とＰ20の間およびＰ20とＰ１の間の柱穴２穴を欠くが、計32穴を検出した。柱穴の掘り方の径は、24～60cmを測り、検出面からの深さは20～70cmである。また柱の抜取り穴の径は15～30cmである。なお、本建物の柱穴内においては、礎板・礎詰などの補強は認められなかった。

出土遺物　柱抜取り後の整地層・柱抜取り穴内・掘り方内から出土している。ただし、平面規模が大きく柱穴の数が多いのとは対照的に、遺物の出土量は多くない。

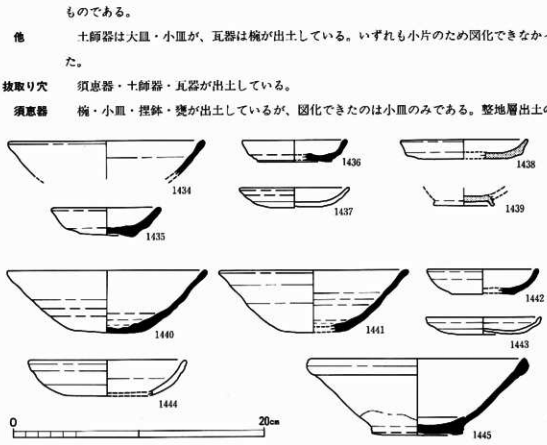
整地層　柱抜取り後の整地層からは、須恵器・土師器・瓦器が出土しているが、図化できたのは須恵器のみである。

須恵器　椀・小皿・甕が出土している。椀は口縁部しか残存していないため、具体的な特徴を指摘することは困難である。小皿は、体部から口縁部にかけてほぼ直線的にのびるタイプのものである。

他　土師器は大皿・小皿が、瓦器は椀が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

抜取り穴　須恵器・土師器・瓦器が出土している。

須恵器　椀・小皿・擂鉢・甕が出土しているが、図化できたのは小皿のみである。整地層出土の



第598図　ＳＢ69出土土器

須恵器・小皿に比べて底部から体部にかけての屈曲が顕著である。

土師器　大皿・小皿・坏・甕・鍋が出土しているが、図化できたのは小皿のみである。口縁部は２段の横方向のナデ調整により仕上げられている。底部は手捏ねによる成形後、ナデ調整により仕上げられている。

瓦器　椀・小皿が出土している。椀は底部のみの残存であるが、高台は比較的しっかりしたものである。小皿は、底部外面を手捏ねにより仕上げる以外は、ナデ調整により仕上げられている。内面には暗文がわずかに認められる。

掘り方　須恵器・土師器・瓦器・白磁・石器が出土している。

須恵器　椀・小皿・甕が出土している。椀は図化しだ２個体のうち底部の残存するもの（1441）は、内面見込みに段をもたないタイプで、底部から体部への変換部も比較的丸くなっている。小皿は、底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がるタイプである。

土師器　大皿・小皿・甕が出土している。大皿・小皿とも口縁部を２段のナデ調整により仕上げるタイプのものである。底部はいずれも手捏ねにより成形されている。

瓦器　椀が出土しているが、小片である。

白磁　Ⅳ類に分類される碗が１個体出土している。

石器　Ｐ14掘り方より砥石が１点出土している。10.8×3.9×3.30cmと柱状を呈するリソイダイトの３面を使用している。

時期　柱抜取り後の整地層・柱抜取り穴内・掘り方内から出土しているが、それぞれの土器間で顕著な時期差を認めることは困難である。したがって、本建物の存続は比較的短期間であったと判断され、その時期は川除14期と考えられる。

第599図　ＳＢ69 出土石器

第232表　ＳＢ69出土土器観察表

番号	器種	法量（cm） 口径	器高	底径	縁径	最大径	厚さ	色調	残存状況	特徴・その他
1434	須恵器・椀	(15.4)	残2.9	—	—	—	—	灰白	1/4	P17整地層出土
1435	須恵器・小皿	8.8	2.3	4.4	—	—	26	明青灰	完存	P17整地層出土
1436	須恵器・小皿	(8.2)	1.7	(5.7)	—	—	20	灰白	1/3	P28柱痕出土
1437	土師器・小皿	(8.6)	1.5	(4.8)	—	—	17	橙～浅黄橙	1/4	口縁部２段の横ナデ・粗良な胎土　P17柱痕出土
1438	瓦器・小皿	(10.0)	1.5		—	—	15	灰	1/4	見込みに暗文あり　P33柱痕出土
1439	瓦器・椀	—	残0.9	(4.0)	—	—	—	灰～灰白	底部2/3	P15柱痕出土
1440	須恵器・椀	(16.0)	残4.5	—	—	—	—	灰	口縁部1/6	P22掘り方出土
1441	須恵器・椀	(14.8)	4.9	(5.4)	—	—	33	灰白	1/7	P28掘り方出土
1442	須恵器・小皿	(8.6)	2.0	(5.0)	—	—	23	灰白	1/5	焼成不良　P28掘り方出土
1443	土師器・小皿	(9.0)	1.4		—	—	15	灰白	1/4	口縁部２段の横ナデ　P22掘り方出土
1444	土師器・大皿	(12.4)	残2.8	—	—	—	—	灰白	1/6	口縁部２段の横ナデ　P17掘り方出土
1445	白磁・椀	16.8	6.0	5.6	—	—	35	明オリーブ灰	底部完存・口縁部欠か	P16掘り方出土

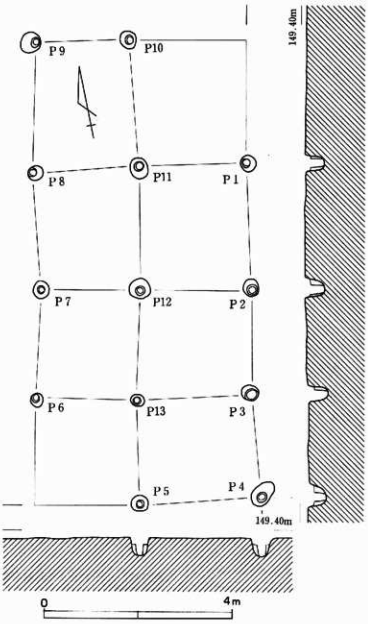
ＳＢ７０（図版137・157・181）

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂ東側に位置する。

形状・規模　Ｎ－12°－Ｅに棟軸方向をとる、桁行４間、梁行２間の総柱の掘立柱建物である。規模は、桁行方向で9.7m、梁行方向で4.6mを測り、面積は44.6m²である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.42m、梁行が2.30mである。

柱穴　北東隅と南西隅の２穴を欠く計13穴を検出した。掘り方の径は28～44cmを測り、検出面からの深さは36～44cmである。また、各柱穴とも柱の抜取り穴を検出し、その径は16～22cmである。

地鎮　Ｐ11では、掘り方を半裁したところ、掘り方下層に礎板を置き、その上に柱を建て、さらに柱の周囲を拳大の礫で補強しているようすを観察することができた。また、礎板を取り巻くように捏鉢が入れられていた。建物を建てる前の地鎮を示す良好な資料と考えられる。



第600図　ＳＢ70

なお、捏鉢は、基本的には口縁部を上に向けた正位の状態で出土しており、詳しく観察すると、底部が一部礎板の下まで潜りこんでいるかのような出土状況を示している。ただし、礎板の上面が大きく傾いていることから建物の重みの影響を受けており、当初の状況を示すものではない。したがって、当初の段階で捏鉢が礎板の下に置かれていた、つまり捏鉢を置きその中に礎板を据えていたのかどうかは判断できない。少なくとも、礎板を据えるのと捏鉢を置くのがほぼ同時であったことは確実である。

礎板　板というより直方体に近いもので、平面は18×15cmで厚さは最大で11cmを測る。樹種は

ヒノキである。

擂鉢　神出古窯跡群産と考えられる比較的良好な胎土からなる土器である。口縁端部を体部の立ち上がり角に直交するようにナデ調整を施し、わずかに外下方向につまみ出している。

出土遺物　全体的に遺物量は少ないが、柱抜取り後の整地層および柱抜取り穴内・掘り方内より出土している。

整地層　量的には少なく須恵器・小皿が出土しているのみである。

抜取り穴　須恵器・土師器・瓦器が出土している。また、P11内からは石硯が出土している。

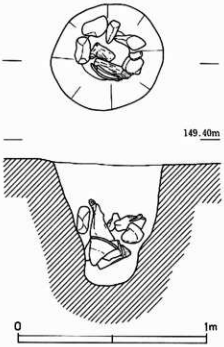
須恵器　椀・小皿・甕が出土しており、図化できたのは椀と小皿である。

土師器　小皿・ミニチュアが出土している。

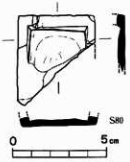
小皿は、口縁部を２段のナデ調整により仕上げており、底部は回転糸切りにより切り離されている。ミニチュアは、甕を小型化したものである。内外面ともロクロを用いたナデ調整により仕上げているが、底部の切離しについては、磨滅のため観察できなかった。胎土は、若干砂粒を含むが、全体的に精良である。

瓦器　椀が出土しているが、図化できなかった。

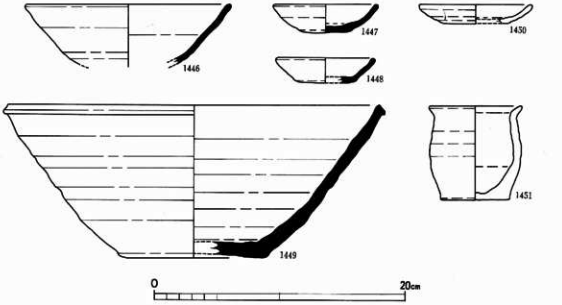
石硯　長方硯に分類されるもので、海部側約1/3が残存している。幅4.10cmを測り、残存長は4.75cmである。また、縁帯部の上面は



第601図　ＳＢ70Ｐ11



第602図　ＳＢ70出土石硯



第603図　ＳＢ70出土土器

剥離しているため、本来の厚みは明らかにしえないが、残存する厚みは0.55cmである。また縁帯部の幅は0.45cmである。海部は使用のため擦痕が認められ、陸部との比高はわずか0.15cmである。裏面はほぼ平坦であるが、わずかに凹面をなしている。粘板岩製と考えられる。

掘り方内　須恵器・土師器・瓦器が出土しているが、いずも小片のため図化できなかった。須恵器は、椀が出土している。土師器は、大皿・小皿・坏・ミニチュアが出土している。瓦器は椀が出土している。

時期　柱抜取り後の整地層・柱抜取り穴内そして掘り方内より出土しているが、いずれも量的には多く出土していないため、各段階での時期差を判断することは困難である。ただし、他の建物の傾向から判断すると、各段階において明確な時期差は認められないようである。したがって、本建物を構成する柱穴内より出土している土器から判断すると、時期は川除14期と考えられる。

第233表　ＳＢ70出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	頸径	最大径	胎厚			
1446	須恵器・甕	(16.2)	残4.7	—	—	—	—	青灰	口縁部後か	P14残存出土
1447	須恵器・小椀	(8.2)	2.2	(4.2)	—	—	29	灰	1/4	P8残存出土
1448	須恵器・小椀	(7.8)	2.0	(4.0)	—	—	25	灰	1/2	P12結痕出土
1449	須恵器・鉢体	(29.2)	12.0	(10.4)	—	—	40	灰白	1/2	体部下半に使用痕あり　P11結痕出土
1450	土師器・小皿	(9.6)	1.5	(5.0)	—		16	淡黄橙	1/4	底部糸切り　P8残存出土
1451	土師器・ミニチュア	(7.2)	7.4	(5.3)	—	—		淡灰橙	1/2	底部へラ起こしの後ナデ　P6残存出土

ＳＢ７１（図版136）

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂ東側に位置する。本建物の西半分は、ＳＢ70の北側半分とほぼ重複している。また、建物の北側はＳＥ10とＳＥ11のほぼ中間にあたる。

形状・規模　Ｎ－78°－Ｗを棟軸方向にとる、桁行３間、梁行３間の総柱の掘立柱建物である。規模は、桁行方向で7.32m、梁行方向で6.96mを測り、面積は50.9㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行で2.44m、梁行で2.32mである。

柱穴　本建物は基本的には総柱であるが、建物内で検出した柱穴はＰ11・Ｐ12の２穴のみである。また、南側梁行のＰ５とＰ６の間および北西隅の柱穴を検出することができなかった。ただし、北西隅の柱穴については、当初から存在しなかった可能性もある。

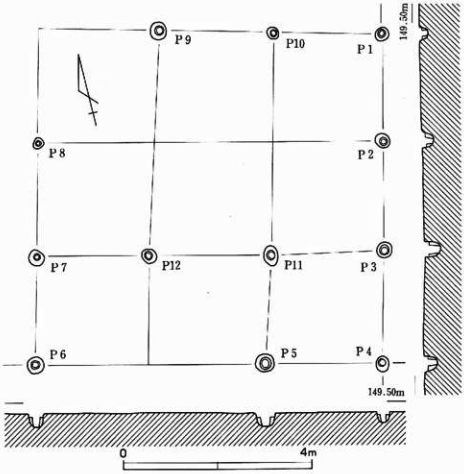
柱穴は計12穴検出した。掘り方の径は22～40cmを測り、検出面からの深さは20～36cmである。また、柱の抜取り穴の径は12～24cmである。

なお、各柱穴内において、礎板・礫詰などの補強は認められなかった。

出土遺物　柱抜取り穴内と掘り方内より出土している。

抜取り穴　須恵器・土師器・白磁が出土している。

須恵器　椀と小皿が出土している。椀は底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がるもので、底部は回転糸切りにより切り離されている。小皿は、底部からほぼ直線的にたちあがり、



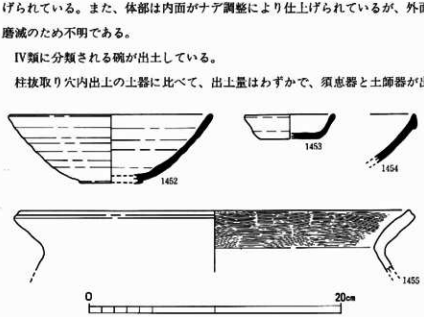
第604図　ＳＢ71

口縁端部が肥厚するもので、椀同様回転糸切りで切り離されている。

土師器　大皿・小皿・坏・甕が出土しているが、図化できたのは甕のみである。甕は口縁部が残存するだけである。口縁部内面は横方向のハケ調整により、外面はユビオサエにより仕上げられている。また、体部は内面がナデ調整により仕上げられているが、外面については磨滅のため不明である。

白磁　Ⅳ類に分類される碗が出土している。

掘り方内　柱抜取り穴内出土の土器に比べて、出土量はわずかで、須恵器と土師器が出土している。



第605図　ＳＢ71出土土器

ただし、図化できるものはなかった。須恵器は椀と小皿が出土している。土師器は小皿と坏が出土している。

時期　掘り方内出土の遺物がわずかのため、時期を明らかにすることは困難であるが、小片を見るかぎり、柱抜取り穴内出土の土器と明瞭な時期差を認めることは困難である。したがって、柱抜取り穴内出土の遺物から判断すると、川除13期と考えられる。

第234表　ＳＢ71出土土器観察表

番号	器種	法量（cm） 口径	器高	底径	頸径	胴径	最大径	粉数	色調	残存状況	特徴・その他
1452	須恵器・椀	(16.0)	5.4	(4.8)	—	—		33	灰白	1/6	P9付近出土
1453	須恵器・小皿	(7.0)	1.9	(4.6)	—	—		27	灰白	底部1/3・口縁部欠か	P8付近出土
1454	白磁・碗	—	残3.9	—	—	—	—	—	明オリーブ灰	口縁部欠か	P3付近出土
1455	土師器・甕	(31.0)	残4.8	—	(27.2)				にぶい黄橙	口縁部1/4	P6付近出土

ＳＢ７２（図版136）

検出状況　掘立柱建物群Ｂの東側に位置する。ＳＢ70・ＳＢ71とほぼ重複している。

形状・規模　Ｎ－12°－Ｅに棟軸の方向をとる、桁行４間、梁行４間の総柱の掘立柱建物である。規模は桁行で9.84m、梁行で8.88mを測り、面積は87.4m²と大型の建物である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行で2.46m、梁行で2.22mである。

なお、本建物内南東隅にＳＫ118が存在する。この土壙は、南東部の２間×１間の柱穴間に柱穴と重複することなくあり、その主軸方向が本建物とほぼ一致することから、本建物に伴うものと判断している。

柱穴　１穴も欠くことなく、計25穴検出した。掘り方の径は28～64cmを測り、検出面からの深さは32～52cmである。また柱抜取り穴の径は14～40cmである。

なお、これら25穴の柱穴内においては、礎板・礎詰などの補強は認められなかった。

ＳＫ118　平面形は不整形ながらも隅円長方形を呈する。検出面における規模は、主軸方向で405cm、その直交方向で165cmを測る。横断面は皿形を呈し、土壙中央部における検出面からの深さは８cmである。本土壙内には、暗褐灰色砂混じりシルト層１層が堆積していた。

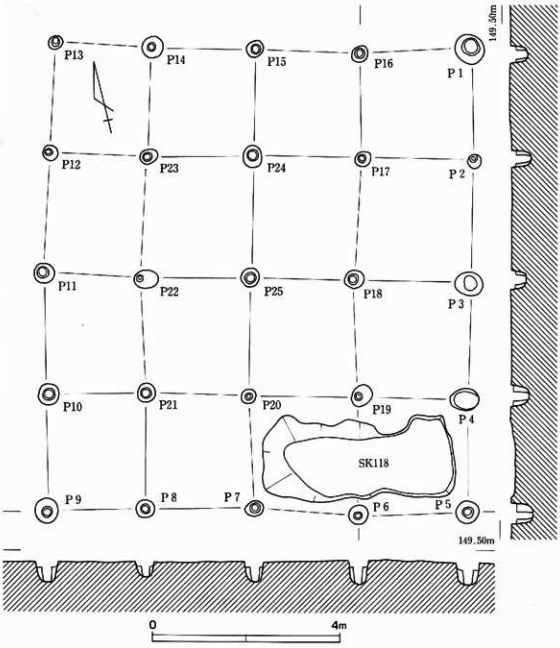
本土壙に伴う遺物は、土器が出土しているが、量的にわずかで図化できるものはなかった。須恵器の椀と土師器の鍋・坏・皿そして瓦器椀・白磁碗が出土している。

出土遺物　柱抜取り穴内と掘り方内より出土しているが、大型の建物であるのとは対照的に出土量は少ない。

抜取り穴　須恵器・土師器・瓦器が出土している。ただし、図化できたのは須恵器に限られる。

須恵器　椀・小皿・捏鉢・甕が出土しているが、図化できたのは椀と捏鉢である。椀は、底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁端部がわずかに肥厚するものである。底部は回転糸切りにより切り離されている。捏鉢は、底部を欠くが、体部から口縁部までわずかに内湾しながら立ち上がるもので、口縁端部を体部立ち上がり角に対して直交するようにナデによって押さえている。内面の底部付近は、使用による磨滅が顕著である。

土師器　大皿・小皿・甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できるものはなかった。ま



第606図　ＳＢ72

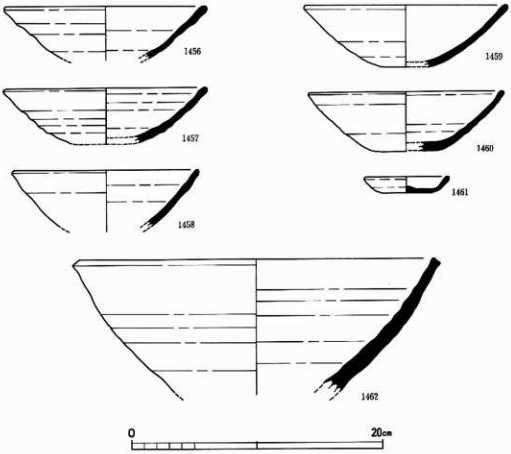
た瓦器は、椀の小片が出土している。

掘り方内　須恵器・土師器・瓦器が出土している。このなかで図化できたのは須恵器に限られる。

須恵器　椀・小皿が出土している。椀は図化した４個体とも、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がるタイプのもので、柱抜取り穴内出土の須恵器の椀とほぼ同じ形態のものである。底部まで残存するのは１個体のみであるが、回転糸切りにより切り離されている。小皿についても、底部は回転糸切りにより切り離されている。

土師器他　土師器は大皿・小皿が、瓦器は椀がそれぞれ出土している。

時期　本建物の時期を考えるにあたって、柱穴出土の遺物に加えて、ＳＫ118出土遺物もその材料となる。しかし、当土壙出土遺物は先述したとおり小片のため、時期を判断することは困難である。ただし、これらの遺物、特に須恵器については柱穴内出土の土器との間に時



第607図　ＳＢ72出土土器

期差を認めることはできない。また、柱穴内出土の土器についても、柱抜取り穴内出土土器と掘り方内出土土器との間でも時期差を認めることはできない。したがって、これらの出土土器総体から判断して、川除14期と考えられる。

第235表　ＳＢ72出土土器観察表

番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	脚径	最大径	指数	色調	残存状況	特徴・その他
1456	須恵器・椀	(16.0)	残4.2	—	—	—	—	灰	口縁部1/8	P20掘り方出土
1457	須恵器・椀	(15.8)	残4.3	—	—	—	—	灰白	口縁部～体部1/3	1～4mm大の礫含む・口縁部の歪み顕著　P3掘り方出土
1458	須恵器・椀	(14.8)	残4.5	—	—	—	—	オリーブ灰	口縁部1/5	P24柱痕出土
1459	須恵器・椀	(16.0)	4.9	3.4	—	—	30	灰白	口縁部1/6	P15柱痕出土
1460	須恵器・皿	(15.4)	4.7	(5.6)	—	—	30	灰白	1/9	P24掘り方出土
1461	須恵器・小皿	(6.6)	1.3	(4.0)	—	—	19	灰白	1/4	P1掘り方出土
1462	須恵器・長胴	(28.4)	残10.5	—	—	—	—	明赤灰～灰褐	口縁部～体部後か	内面下半に使痕跡あり　P13柱痕出土

ＳＢ７３（図版136）

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの東側に位置する。ＳＢ72と重複しており、ＳＢ70の東側に棟軸方向を若干違えるがほぼ隣接している。また、ＳＥ10の南側にあたる。

形状・規模　Ｎ－12°－Ｅを棟軸方向にとる、桁行２間、梁行２間の比較的小型の掘立柱建物である。

規模は、桁行で5.44m、梁行で4.56mを測り、面積は24.8㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行で2.72m、梁行で2.28mである。

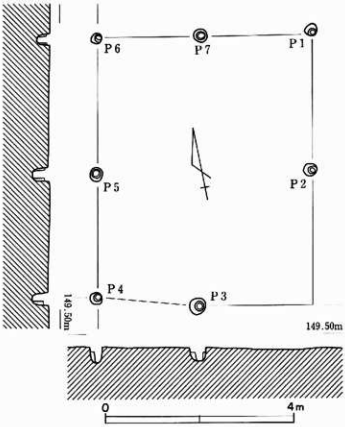
柱穴　南東隅を欠く計7穴を検出した。掘り方の径は22～36cmを測り、検出面からの深さは28～36cmである。柱抜き取り穴の径は16～20cmである。

なお、本建物にともなう柱穴内において、礎板・礎詰などの補強は認められなかった。

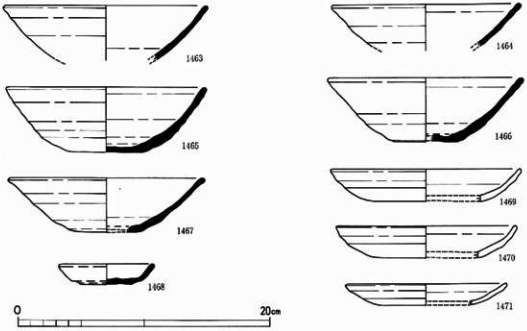
出土遺物　建物の規模からすると、比較的多く出土している。柱抜取り穴内および掘り方内より出土している。

抜取り穴　須恵器・土師器が出土している。

須恵器　椀と小皿が出土しているが図化できたのは椀に限られる。椀は、底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がるものと、ほぼ直線的に立ち上がるものとが認められるが、時期的



第608図　SB73



第609図　SB73出土土器

にはほとんど差がないものと考えられる。

土師器　大皿と小皿が出土しているが、図化できたのは大皿のみである。大皿は口縁部を2段のナデ調整により仕上げ、底部は手捏ねにより成形されている。比較的精良に近い胎土である。

掘り方内　須恵器と土師器が出土している。

須恵器　椀と小皿が出土している。椀は、柱抜き取り穴内出土の須恵器椀とほとんど同じ特徴をもつものである。わずかに口縁端部を外方へ外反させている。底部は回転糸切りにより切り離されている。

土師器　大皿と小皿が出土しているが、図化できたのは大皿に限られる。大皿は、柱抜取り穴内出土の土師器の大皿とほぼ同じ特徴を有するものである。いずれも口縁部を2段のナデ調整により仕上げられている。

時期　柱抜取り穴内出土土器より本建物の下限を、掘り方内出土土器より上限を判断するものであるが、両者の間に明確な判断を認めることは困難である。したがって、出土遺物から判断して川除14期と考えられる。

第236表　ＳＢ73出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	脚径	最大径	個数	色調	現存状況	特徴・その他	
1463	須恵器・椀	(16.0)	残4.2	―	―	―	―	灰	口縁部1/6		P7柱底出土
1464	須恵器・椀	(15.0)	残3.3	―	―	―		明黒灰	口縁部1/7	内外面に黒色の斑点	P1柱底出土
1465	須恵器・椀	(15.7)	5.1	(5.0)		―	32	灰白～灰	1/4	口縁部が歪んでいる	P7柱抜出土
1466	須恵器・椀	(15.2)	5.0	(5.2)	―	―	32	明青灰	1/3	1～8mm大の礫含む	P4柱抜出土
1467	須恵器・椀	(15.2)	4.3	(5.9)	―	―	28	灰	口縁部1/4・底部欠か		P1掘り方出土
1468	須恵器・小皿	(7.4)	1.6	(4.0)	―	―	21	灰	1/4		P2掘り方出土
1469	土師器・大皿	(15.6)	2.5	(8.2)	―	―	16	浅黄橙	口縁部1/10	口縁部2段のナデ・精良に近い胎土	P4柱抜出土
1470	土師器・大皿	(14.2)	2.3	(8.4)	―	―	17	にぶい黄橙	口縁部1/4		P2掘り方出土
1471	土師器・大皿	(12.6)	1.7	(6.6)	―	―	13	灰白	口縁部1/9		P1掘り方出土

ＳＢ７４（図版137・157・158）

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂ西側に位置する。

形状・規模　Ｎ－15°－Ｅを棟軸方向にとる、桁行５間、梁行３間の総柱の大型掘立柱建物である。規模は、桁行方向で11.70m、梁行方向で8.80mを測る。面積は103.0㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行方向で2.34m、梁行方向で2.26mである。

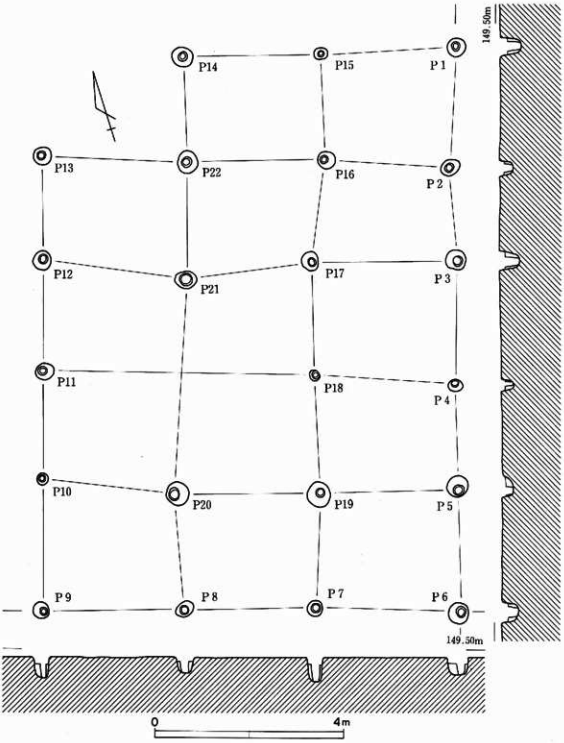
柱穴　本建物は基本的には総柱であるが、北西隅とＰ11とＰ18の間の２穴を欠き、計22穴を検出した。掘り方の径は24～54cmを測り、検出面からの深さは24～52cmである。また、柱抜取り穴の径は12～24cmである。

なお、各柱穴において、礎板および礫詰などの補強は認められなかった。

出土遺物　柱抜取り後の整地層、柱抜取り穴内および掘り方内より出土している。

整地層　柱抜取り穴の整地層からは、須恵器・土師器・瓦器が出土している。

須恵器　椀と小皿が出土しているが、図化できたのは小皿のみである。小皿は、口縁部を体部に

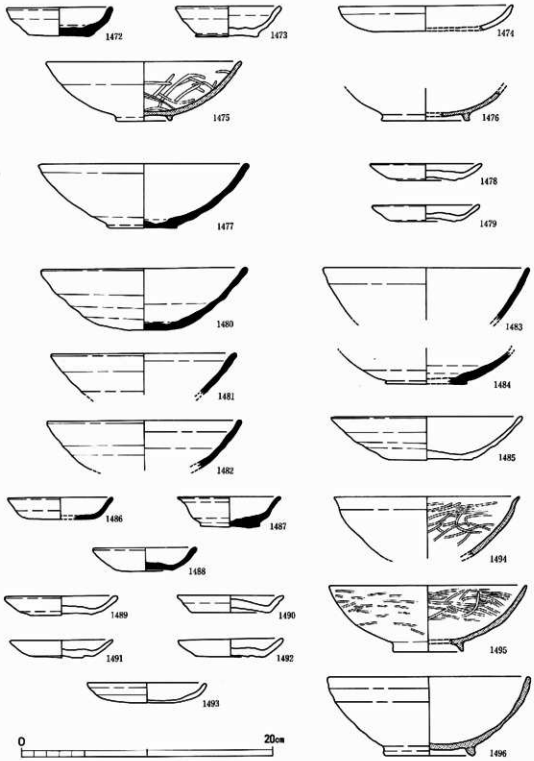


第610図　ＳＢ74

対して屈曲させて立ち上がらせている。底部は回転糸切りにより切り離されている。

土師器　大皿と小皿が出土している。大皿は、口縁部を１段のナデ調整により仕上げている。小皿は、体部から口縁部にかけて回転ナデ調整により仕上げている。また、底部は回転糸切りにより仕上げられている。

瓦器　椀が出土している。1475は、口径に対して器高が低い椀で、断面逆台形を呈する比較的しっかりした高台が貼り付けられている。口縁部は２段の横方向のナデ調整により仕上げ



第611図　ＳＢ74出土土器

られている。暗文は、内面については確実に確認できる。外面についてはわずかにミガキの痕跡を確認することができたが、図化できなかった。

抜取り穴　須恵器・土師器・瓦器・白磁が出土している。

須恵器　椀・小皿・甕が出土しているが、図化できたのは椀に限られる。

土師器　小皿・坏・甕が出土しているが、図化できたのは小皿のみである。図化した2個体の小

皿は、ともに口縁部を回転ナデにより仕上げ、底部は回転糸切りにより仕上げている。

他　この他、瓦器と白磁が出土している。瓦器は椀が出土している。また白磁については、小片のため器種を特定することができない。

掘り方内　須恵器・土師器・瓦器・白磁が出土している。

須恵器　椀・小皿・甕が出土しているが、甕は小片のため図化できなかった。

椀は比較的多く出土しているが、いずれもほぼ同じタイプに分類されるものである。小皿は、全体を回転ナデ調整により仕上げており、底部は回転糸切りにより切り離されている。

土師器　大皿・小皿・坏・甕が出土しているが、図化できたのは小皿と坏である。小皿は、図化した４個体とも回転ナデ調整により仕上げており、底部は回転糸切りにより切り離されている。坏についても小皿同様の調整方法により仕上げられている。

瓦器　３個体図化できたが、口縁端部の形態において個体差が認められる。1494は端部を強いナデにより外反させ、1495は体部から内湾気味に立ち上がり薄くおさめられている。また1496は、体部に対して口縁部が全体に肥厚傾向にあり、２段のナデ調整により仕上げられている。

暗文については、1495では内外面とも確認でき図化できた。1494については外面にも暗文の痕跡を確認することができたが図化できなかった。1496については内外面とも磨滅が著しく確認することはできなかった。

白磁　碗が出土しているが小片のため図化できなかった。

時期　柱抜取り後の整地層・柱抜取り穴内・掘り方内から出土しているが、それぞれの土器について明確な時期差を認めることは困難である。したがって、これらの出土土器全体から判断して川除13期と考えられる。

第237表　ＳＢ74出土土器観察表（１）

番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	底部	最大径	胎土	色調	残存状況	特徴・その他
1472	須恵器・小皿	8.2	2.4	4.9	—	—	29	明黄灰	完存	P2整地層出土
1473	土師器・小皿	8.2	2.4	5.0	—	—	29	黄灰	底部完存・口縁部1/2	底部糸切り　P2整地層出土
1474	土師器・大皿	(13.8)	2.0	(8.6)	—	—	14	浅黄橙	口縁部1/6	P2整地層出土
1475	瓦器・椀	(15.4)	4.7	4.2	—	—	30	灰	底部完存・口縁部1/4	内面に暗文あり・外面に暗文の痕跡あり　P2整地層出土
1476	瓦器・椀	—	残2.1	(6.8)	—	—	—	暗灰	底部1/4	P2整地層出土
1477	須恵器・椀	16.4	5.1	5.7	—	—	31	灰白	口縁部1/2・底部完存	1～8㎜大の礫含む　P15柱痕出土
1478	土師器・小皿	8.8	1.3	4.6	—	—	14	にぶい橙	底部完存・口縁部1/6	底部糸切り　P1柱痕出土
1479	土師器・小皿	(8.4)	1.3	(4.6)	—	—	15	浅黄橙	1/2	底部糸切り？　P15柱痕出土
1480	須恵器・椀	(16.2)	4.8	(5.3)	—	—	29	灰白	1/2	焼成やや不良　P3掘り方出土
1481	須恵器・椀	(14.6)	残3.2					灰	口縁部僅か	P3掘り方出土
1482	須恵器・椀	(15.4)	残3.8	—	—	—	—	灰	口縁部1/5	1～4㎜大の礫含む　P1掘り方出土
1483	須恵器・椀	(16.2)	残4.1	—	—	—	—	灰白	口縁部1/10	P1掘り方出土
1484	須恵器・椀	—	残2.7	(6.4)	—	—	—	灰白	底部一体部僅か	P1掘り方出土
1485	土師器・坏	14.9	3.4	6.8	—	—	22	浅黄橙	1/2	底部糸切り　P3掘り方出土
1486	須恵器・小皿	(8.2)	1.7	(5.4)	—	—	20	灰白	1/3	P1掘り方出土

第238表　ＳＢ74出土土器観察表（２）

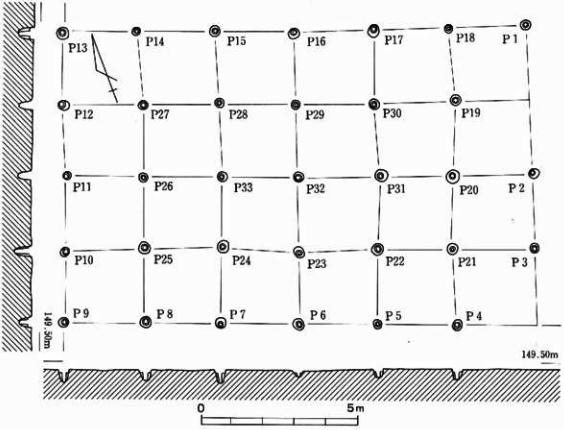
番号	器種	法量（cm）						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	頸径	最大径	指数			
1487	須恵器・小皿	(8.0)	2.5	4.7	—	—	31	灰白～灰	3/4	他の須恵器と粘土が異なる　P14掘り方出土
1488	須恵器・小皿	8.0	1.9	4.4	—	—	23	灰	底部完存・口縁部2/3	P3掘り方出土
1489	土師器・小皿	(9.0)	1.5	5.0	—	—	16	橙	2/3	底部糸切り　P3掘り方出土
1490	土師器・小皿	(8.4)	1.4	(3.1)	—	—	16	橙	口縁部1/2	底部糸切り　P15掘り方出土
1491	土師器・小皿	8.4	1.4	4.9	—	—	16	にぶい橙	3/4	底部糸切り　P1掘り方出土
1492	土師器・小皿	8.1	1.5	5.3	—	—	18	橙	4/5	底部糸切り　P1掘り方出土
1493	土師器・小皿	9.4	1.6		—	—	17	淡黄	口縁部2/3	P22掘り方出土
1494	瓦器・椀	(14.6)	残4.9	—	—	—	—	黒	1/5	内面に暗文あり・外面に暗文の痕跡あり　P1掘り方出土
1495	瓦器・椀	(15.8)	5.6	(5.4)	—	—	35	灰	1/7	内外面に暗文あり　P1掘り方出土
1496	瓦器・椀	(15.7)	6.2	(6.8)	—	—	39	灰	1/3	焼成ややが良　P15掘り方出土

ＳＢ７５（図版136・158）

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂ南西部に位置する。

形状・規模　Ｎ－72°－Ｗを棟軸方向にとる、桁行６間、梁行４間の総柱の大型掘立柱建物である。規模は桁行方向で14.76m、梁行方向で9.24mを測る。面積は136.4m²である。柱穴間の心々距離の平均値は、梁行方向で2.46m、梁行方向で2.31mである。

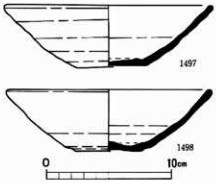
柱穴　南東隅とＰ１とＰ２の間の２穴を欠く、計33穴を検出した。ただし、南東隅については、



第612図　ＳＢ75

柱穴が検出されるべき位置に小溝があることから、本来この位置には柱穴がなかった可能性も考えられる。

掘り方の径は30～42cmを測り、検出面からの深さは21～57cmである。また、柱の抜取り穴の径は15～21cmである。なお、これらの柱穴においては、礎板・礫詰などの補強は認められなかった。



第613図　ＳＢ75出土土器

出土遺物　本建物に伴う遺物は、建物の規模が大きいのとは対照的にわずかである。遺物は、柱抜取り穴内と掘り方内より出土している。

抜取り穴　須恵器・土師器・瓦器・白磁が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。須恵器は、椀・小皿・甕が出土している。土師器は小皿が出土している。そして、瓦器は椀と小皿が、白磁は碗が出土している。

掘り方内　須恵器と土師器が出土している。

須恵器　椀が出土している。図化した２個体は、いずれも底部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる点が特徴的である。底部は回転糸切りにより切り離されている。

土師器　甕が出土している。

時期　出土遺物の量がわずかである上に、図化できたのは掘り方内より出土した須恵器の椀２個体のみである。これらの土器をもとに判断すると、川除14期と考えられる。

第239表　ＳＢ75出土土器観察表

番号	器種	法量（cm）						色調	残存状況	特徴・その他	
		口径	器高	底径	脚径	最大径	得点				
1497	須恵器・椀	16.4	5.0	5.7	―	―	30	灰～灰白	ほぼ完存	1～4mm大の礫含む	P24期９方出土
1498	須恵器・椀	(15.8)	4.9	(5.6)	―	―	31	灰	1/3		P26期９方出土

（２）柱穴

Ｐ１３

検出状況　Ⅳ区の北西部、小微高地ｄのほぼ中央で検出されたが、掘立柱建物を構成する柱穴にはならない。古墳時代の掘立柱建物ＳＢ55の北方にあたる。

形状・規模　円形の柱穴であり、掘り方の直径28cm、柱痕の直径11cm、深さ27cmを測る。

出土遺物　黒色土器Ｂ類の椀が１点、柱痕内より出土している。1551は底部の破片である。体部の内外面にはヘラミガキが認められ、底部の切離しには回転糸切り手法を用いている。

時期　出土土器から川除12期に位置付けられる。

Ｐ１４

検出状況　Ⅳ区の中央部、小微高地ｄの中央で検出されたが、掘立柱建物を構成する柱穴にはならない。ＳＢ56と重なっているが切り合いがなく、先後関係は不明である。

形状・規模　円形の柱穴であり、掘り方の直径26cm、深さ５cmと非常に浅い。柱痕は確認できなかっ

た。

出土遺物　土師器の中皿が1点、掘り方埋土から出土している。体部はヨコナデ仕上げである。

時期　川除13～14期である。

Ｐ１５（図版158）

検出状況　Ⅳ区の中央部、小微高地ｄの中央で検出されたが、掘立柱建物を構成する柱穴にはならない。ＳＢ56の西側柱筋と重なっているが切り合いがなく、先後関係は不明である。

形状・規模　円形の柱穴であり、掘り方の直径32cm、柱痕の直径20cm、深さ39cmを測る。

出土遺物　土師器の甕・小皿が各1点、掘り方埋土から出土している。

1552（第618図）は体部に左上がりの平行タタキをもつ甕である。1542（第618図）は体部をヨコナデ、底部内面をナデ、底部の切離しには回転糸切り手法を用いている。

時期　出土土器から川除14期と考えられる。

Ｐ１６

検出状況　Ⅳ区の中央部、小微高地ｄの中央南寄りで検出されたが、掘立柱建物を構成する柱穴にはならない。ＳＤ104に切られている。

形状・規模　円形の柱穴であり、掘り方の直径25cm、柱痕の直径10cm、深さ30cmを測る。

出土遺物　土師器の小皿が2点、掘り方埋土から出土している。

1535（第618図）は、体部にヨコナデを施しており、口縁部が外反している。底部の切離しには回転糸切り手法を用いている。

時期　出土土器から川除12～14期と考えられる。

Ｐ１７

検出状況　Ⅳ区の中央部、小微高地ｄの中央で検出されたが、掘立柱建物を構成する柱穴にはならない。ＳＤ103とＳＤ104の間に位置し、ＳＢ57と重なっている。

形状・規模　円形の柱穴であり、掘り方の直径50cm、柱痕の直径20cm、深さ29cmを測る。

出土遺物　土師器の小皿が1点、柱痕埋土から出土している。

1536（第618図）は、体部下半に強いヨコナデを施しており、屈曲点を形成している。底部内面はナデ仕上げであり、底部の切離しには回転糸切り手法を用いている。

時期　出土土器から川除12～14期と考えられる。

Ｐ１８

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの北東部に位置する。ＳＥ10とＳＥ11を結ぶラインのほぼ中間部よりややＳＥ11よりに位置する。ＳＢ71の北側梁行ライン上にあたる。

形状・規模　掘り方の径は28cmを測り、検出面からの深さは15cmである。柱抜取り穴の径は14cmである。

出土遺物　柱抜取り穴内より、須恵器の椀と土師器の小皿・鍋が出土している。このうち図化できたのは土師器の小皿の1個体のみである。（第618図1540）口縁部は横方向のナデ調整によ

り仕上げられ、底部は手捏ねにより成形されている。

時期　柱抜取り穴内出土の遺物から、川除14期と考えられる。

Ｐ１９

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの北東部に位置する。ＳＥ10の西２ｍに位置する。ＳＢ72のＰ16と掘り方を一部共有しているが、両者の先後関係は明らかにできなかった。

形状・規模　掘り方の径は33㎝を測り、検出面からの深さは19㎝である。また、柱抜取り穴の径は18㎝である。

出土遺物　柱抜取り穴内と掘り方内より出土している。

抜取り穴　須恵器・土師器・瓦器が出土している。須恵器は椀が、土師器は小皿が、そして瓦器は椀が出土している。このなかで図化できたのは瓦器椀の１個体（第618図1553）のみである。

瓦器　ほぼ完形で残存状況も良好である。高台は断面方形で、外方に張り出す重厚なものである。体部は椀形を呈し、内湾気味に立ち上がるが、体部に比べて口縁部ほど肥厚する傾向にある。そして口縁部は、２段のナデ調整により仕上げられており、口縁端部内面には１条の沈線が施されている。

内外面とも比較的丁寧なミガキが施されているが、外面は内面に比べて若干粗い傾向にある。また見込みにもミガキによるジグザグ状の暗文が施されている。

掘り方内　須恵器の椀と土師器の坏が出土しているが、いずれも小片のため図化できるものはなかった。

時期　一つの柱穴としては比較的多くの土器が出土しているが、図化できたのは瓦器椀１個体に限られる。そして、他の土器は小片のため図化できず、しかも時期を判断する対象とすることは困難である。したがって、図化した瓦器椀をもとにすると、本柱穴の時期は川除12期と考えられる。

Ｐ２０

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの北部に位置する。ＳＤ115の南側肩部に位置し、その掘り方の一部を切っている。

形状・規模　掘り方の径は37㎝を測り、検出面からの深さは36㎝である。また、柱抜取り穴の径は、19㎝である。

出土遺物　柱抜取り穴内から白磁碗（第618図1556）のみが出土している。底部から口縁部まで残存するものであるが、口縁部の残存はわずかである。Ⅳ類に分類される碗である。

時期　白磁碗のみでは、他遺跡の出土例をみると出土時期に幅が認められることから、時期を特定することは困難であるが、川除13～14期と考えられる。

Ｐ２１

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの北側に位置する。ＳＢ62内にあたる。

形状・規模　掘り方の径は30㎝を測り、検出面からの深さは15㎝である。また、柱抜取り穴の径は20㎝である。

出土遺物　掘り方内より出土した土師器の小皿1個体のみである。(第618図1544) 口縁部は2段のナデ調整により仕上げられ、底部は手捏ねにより仕上げられている。

時期　掘り方内出土の土師器が時期を判断する唯一の資料である。したがってこの土器から判断すると、川除12～14期と考えられる。

Ｐ２２（図版159）

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの北側に位置する。ＳＸ08の西2mにあたり、ＳＢ65内に位置する。

形状・規模　平面形は楕円形を呈する。長軸方向で39cm、短軸方向で26cmを測り、検出面からの深さは18cmである。なお、本柱穴内においては柱抜取り穴の痕跡を確認することはできなかった。

出土遺物　掘り方内より須恵器の椀と小皿が出土している。このうち図化できたのは小皿の2個体のみである。(第617図1520・1527)

2個体ともほぼ同タイプに分類されるもので、口縁部は強い回転ナデよってわずかに外反している。底部は回転糸切りにより切り離されている。

時期　掘り方内出土の遺物から判断すると、川除12～13期と考えられる。

Ｐ２３（図版181）

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの北西部に位置する。ＳＤ113の西側でＳＤ114とＳＤ121に挟まれた所に位置する。他の遺構との切り合い関係はない。

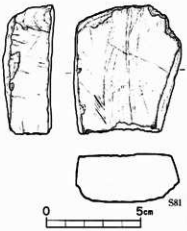
形状・規模　掘り方の径は36cmを測り、検出面からの深さは29cmである。また柱抜取り穴の径は18cmである。

出土遺物　柱抜取り穴内より須恵器・土師器と砥石が出土している。

須恵器は椀が、土師器は小皿が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

砥石　1点出土している。安山岩を利用したもので、平面は6.7×5.4cmの不整形な撥形を呈するが、一辺は欠損している。厚さは2.6cmである。

この砥石は荒研ぎ用と考えられ、4面を使用している。ただし、最も広い面を除いては、使われ方が雑で刃傷が多く認められる。これに対して残りの1面は、使用による擦痕が明瞭に観察できる。そしてこの使用痕をみると磨きの方向が一定しており、丁寧に使用されていたことが推定される。



第614図　Ｐ23出土石器

時期　出土土器がわずかであるため、時期を明確にすることは困難であるが、小片から判断すると川除12～14期と考えられる。

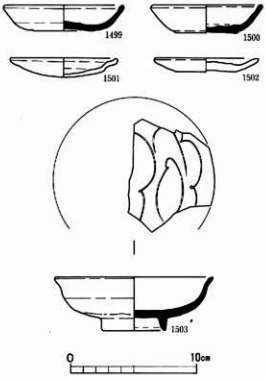
Ｐ２４（図版159）

検出状況　掘立柱建物群Ｂの北西部に位置する。ＳＤ113とＳＤ121が北側で交差する地点の北東側に位置する。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模　掘り方の径は40cmを測り、検出面からの深さは20cmである。また、柱抜取り穴の径は23cmである。

出土遺物　柱抜取り穴内より、須恵器・土師器・瓦器そして白磁が出土している。

須恵器　椀・小皿・甕が出土しているが図化できたのは小皿に限られる。図化した２個体の小皿は、ともに同じタイプのものである。体部から口縁部は、回転ナデ調整により仕上げられ、わずかに内湾気味に立ち上がり口縁端部が肥厚している。底部は回転糸切りにより切り離されている。



第615図　Ｐ24出土土器

土師器　大皿・小皿が出土しているが、図化できたのは小皿２個体である。1501は、いわゆる「て」の字状口縁をなすもので、底部は手捏ねにより成形されている。1502は、口縁部を回転ナデ調整により仕上げ、底部は回転糸切りにより切り離されている。

白磁　碗に分類されるものである。口縁部は強いナデ調整により大きく外反し、口縁部から体部にかけては大きく内湾している。底部は削り出しにより、輪高台をなしている。見込み部にはヘラ描きによる輪花文が描かれている。体部から口縁部への変換部あたりから口縁部にかけて、内外面とも釉薬がかけられている。

時期　木柱穴にともなう遺物は、全て柱抜取り穴に伴うものである。したがって、抜取り穴に伴う遺物から判断すると、「て」の字状口縁部をもつ土師器小皿および白磁の存在から、川除12期と考えられる。

第240表　Ｐ24出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	厚様	最大径	個数	色調	残存状況	特徴・その他
1499	須恵器・小皿	(9.2)	2.1	(4.8)	—	—	22	灰	口縁部～底部1/2	
1500	須恵器・小皿	8.5	2.3	4.9	—	—	27	灰	口縁部2/3	
1501	土師器・小皿	8.4	1.5		—	—	17	橙	ほぼ完存	底部手捏ね
1502	土師器・小皿	(8.0)	1.1	(4.8)	—	—	13	橙～灰白	口縁部～底部1/2	底部回転糸切り／口縁部回転ナデ
1503	白磁・碗	(12.4)	4.2	(5.6)	—	—	33	灰白	底部1/2・口縁部1/10	体部下半～底部ヘラ削り

Ｐ２５

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの北西部に位置する。ＳＤ113とＳＤ121が北側で交差する地点の北東側にあたり、本柱穴の掘り方の一部がＳＤ121と接している。

形状・規模　掘り方の径は49cmを測り、検出面からの深さは27cmである。また、柱抜取り穴の径は18cmである。

出土遺物　柱抜取り後の整地層および柱抜取り穴内より出土している。

整地層　須恵器と土師器が出土している。

須恵器　小皿と甕が出土しているが、図化できたのは小皿（第617図1525）のみである。小皿は、体部から口縁部まで大きく内湾しながら立ち上がり、口縁端部は大きく肥厚している。底部は比較的しっかりしており、回転糸切りにより切り離されている。

土師器　小皿と托が出土しているが、図化できたのは托（第618図1547）のみである。托は、中空な底部から受部が大きく外方向に開き、口縁端部がわずかに肥厚している。底部から口縁部にかけて全て、回転ナデ調整により仕上げられている。また、胎土はかなり精良である。

抜取り穴　土師器と瓦器が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。土師器は小皿が、瓦器は椀が出土している。

時期　柱抜取り後の整地層および柱抜取り穴内から出土しているが、両者の間に明確な時期差を認めることは困難である。そこで、整地層出土の遺物を中心に判断すると、川除13期と考えられる。

Ｐ２６

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの北西部に位置する。ＳＥ11の掘り方南東隅にあたり、ＳＥ11の掘り方を切っている。

形状・規模　掘り方の径は34cmを測り、検出面からの深さは23cmである。また、柱抜取り穴の径は18cmである。

出土遺物　柱抜取り後の整地層・柱抜取り穴内および掘り方内より出土している。

整地層　柱抜取り後の整地層からは、須恵器・土師器と瓦器が出土している。

須恵器　椀が出土している（第617図1515）。体部から口縁部に内湾気味に立ち上がり、口縁部が体部より肥厚する傾向にある。底部は回転糸切りにより切り離されている。

土師器　小皿・甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

瓦器　椀が出土しているが、小片のため図化できなかった。

抜取り穴　土師器の小皿が出土しているだけである。この小皿についても小片のため図化できなかった。

掘り方内　須恵器と土師器が出土しているが、土師器については小片のため、器種の特定も困難である。

須恵器　椀が出土している。整地層出土の椀と、形態上・調整上ほとんど同じ特徴をもつものである。

時期　整地層・柱抜取り穴内そして掘り方内から出土しているが、図化した須恵器の椀でみられたように、それぞれにおいて明確な差を認めることは困難である。したがって、図化し

た土器を中心に判断すると、川除14期と考えられる。

Ｐ２７

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの北部に位置する。ＳＥ11の西約２mにあたる。ＳＤ115を掘り下げた段階で確認できた柱穴であるが、明確な前後関係は不明である。

形状・規模　掘り方の径は36cmを測り、検出面（ＳＤ115の底部）からの深さは21cmである。また、柱抜取り穴の径は17cmである。

出土遺物　柱抜取り穴内および掘り方内より出土している。

抜取り穴　須恵器と土師器が出土している。

須恵器　椀と小皿が出土しているが、図化できたのは小皿のみである。（第617図1522）この小皿は、体部と口縁部の境が強いナデにより明瞭に屈曲している。

土師器　大皿・小皿が出土しているが、いずれも図化できなかった。

掘り方内　土師器の小皿が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　出土土器がわずかであるため、図化した須恵器小皿から判断すると、川除13～14期と考えられる。

Ｐ２８（図版159）

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの北西部に位置する。ＳＤ121とＳＤ113が北側で交差する地点の西側３mの、ＳＤ121の南側に接する位置にあたる。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、掘り方の径は長軸で46cm、短軸で38cmを測り、検出面からの深さは26cmである。また、柱抜取り穴の径は15cmである。

出土遺物　柱抜取り穴内および掘り方内より出土している。

抜取り穴　土師器が出土しているが、小片のため器種の特定も困難である。

掘り方内　須恵器と土師器が出土している。

須恵器　小皿が出土している。（第617図1518）体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部は肥厚している。

土師器　小皿が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　遺物の出土量がわずかであることから、図化できた土器をもとに時期を判断すると、川除13～14期と考えられる。

Ｐ２９

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの北西部に位置する。Ｐ28の南約１mに位置する。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模　ほぼ円形を呈する柱穴で、掘り方の径は30cmを測る。検出面からの深さは22cmである。また、柱抜取り穴の径は16cmである。

出土遺物　柱抜取り後の整地層および柱抜取り穴内より出土している。

整地層　須恵器・土師器と瓦器が出土している。

須恵器　椀が出土しているが、小片のため図化できなかった。

土師器　小皿と托が出土しているが、小皿は図化できなかった。托(第618図1548)は1.6cmと厚い底部から、外方に大きく開きまっすぐのび、口縁端部はわずかに肥厚している。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられており、底部は回転糸切りにより切り離されている。

瓦器　椀が出土しているが、図化できなかった。

抜取り穴　須恵器と土師器が出土しているが、いずれも図化できなかった。須恵器は椀が、土師器は小皿が出土している。

時期　図化できた土器は1548の托1個体のみである。ただし、現在の研究段階においてはこの托のみで時期を判断することは困難である。そこで、本遺跡における托が出土している遺構の時期を参考とすると、本柱穴の時期は川除13期と考えられる。

Ｐ３０（図版159）

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの北西部に位置する。ＳＤ121とＳＤ113が北側で交差する地点の南西隅に位置し、ＳＤ121を切っている。Ｐ29の東約２mにあたる。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、掘り方の規模は長軸で38cm、短軸で30cmを測る。検出面からの深さは18cmである。また、柱抜取り穴の径は18cmである。

出土遺物　柱抜取り後の整地層および柱抜取り穴内より出土している。

整地層　須恵器と土師器が出土している。

須恵器　椀が出土しているが小片のため図化できなかった。

土師器　小皿が出土している。(第618図1539) 体部から口縁部は回転ナデ調整により仕上げられ、底部は回転糸切りにより切り離されている。比較的精良な胎土である。

抜取り穴　須恵器の椀が出土しているが、図化できなかった。

時期　本柱穴に伴う遺物は僅かで、かつ図化できたのは１個体のみである。この図化できた土師器の小皿を中心に時期を判断すると、川除11～12期と考えられる。

Ｐ３１（図版159）

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの北西部に位置する。Ｐ30の南約２mにあたり、他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模　平面形は楕円形を呈する。掘り方の径は、長軸で38cm、短軸で30cmを測り、検出面からの深さは44cmである。また、柱抜取り穴の径は12cmである。

出土遺物　柱抜取り穴内のみから出土している。須恵器・土師器と瓦器が出土している。

須恵器　椀と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

土師器　小皿が出土している。(第618図1546) 体部から口縁部にかけて回転ナデ調整により仕上げられ、底部は回転糸切りにより切り離されている。

瓦器　椀が出土しているが、須恵器同様図化できなかった。

時期　時期を判断することのできるのは、土師器の小皿のみである。したがって、この小皿をもとに判断すると、川除11～12期と考えられる。

Ｐ３２（図版159）

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの北西部に位置する。ＳＤ121とＳＤ113が北側で交差する地点の南東部約１mにあたり、ＳＤ121と掘り方が接している。

形状・規模　平面形は円形を呈する。掘り方の径は45cmを測り、検出面からの深さは57cmである。また柱抜取り穴の径は20cmである。

出土遺物　柱穴の規模が大きいこともあり、柱穴としては比較的多量に出土している。柱抜取り後の整地層および柱抜取り穴内より出土している。

整地層　須恵器と土師器が出土している。

須恵器　椀・小皿・甕が出土しているが、図化できたのは小皿のみである。（第617図1523・1524）図化した２個体とも、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、底部は回転糸切りにより切り離されている。1523に対して1524は比較的深い皿である。

土師器　大皿・小皿・坏・鍋が出土しているが、図化できたのは大皿と小皿である。（第617図1530・1531　第618図1538・1543・1545）

大皿は、図化できたのは２個体である。1531は口縁部を１段のナデ調整により仕上げ、底部は手捏ねにより成形されている。1530は、口縁部を弱いながらも２段のナデ調整により仕上げている。底部の成形は1531と同じである。

小皿は、図化できたのは３個体であるが２つのタイプに分けられる。一つは、1543・1545のように、口縁部をナデ調整により仕上げ、底部は手捏ねにより成形するものである。もう一つ（1538）は、口縁部を回転ナデ調整により仕上げ、底部は回転糸切りにより切り離されているものである。

抜取り穴
土師器　土師器の小皿が出土している。体部から口縁部にかけて回転ナデ調整により仕上げられ、底部は回転糸切りにより切り離されている。

掘り方内
須恵器　須恵器・土師器・瓦器が出土している。

椀と小皿が出土している。このうち図化できたのは椀の２個体（第617図1510・1514）である。２個体とも、ほぼ同じ特徴を有するものである。底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部が肥厚するものである。内面見込みは、明瞭な段落ちは認められないが、それを意識したような強いナデ調整が施されている。

ただし、1514の方が若干古い傾向が認められる。底部においては平底に近い形態をとどめ、また底径に対して口径が小さく深い椀形を呈している。

土師器　小皿が出土している。図化できたのは１個体（第618図1537）に限られる。底部は手捏ねにより整形され、口縁部は１段のナデ調整により仕上げられている。底部を手捏ねにより整形するタイプとしては、底部が厚い傾向にある。

時期　柱抜取り後の整地層および柱抜取り穴内と掘り方内より出土しているが、これらの出土土器をみると時期差を見出すことは困難である。そこで、土器全体から判断すると、川除13～14期と考えられる。

Ｐ３３

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの北西部に位置する。Ｐ32の南約30cmに位置する。他

の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模　平面形は円形を呈する。本柱穴も比較的大型で、掘り方の径は46cmを測り、検出面からの深さは57cmである。また、柱抜取り穴の径は18cmである。

出土遺物　柱抜取り後の整地層より、白磁碗が1個体出土している。（第618図1555）この白磁碗はⅣ類に分類されるものである。

時期　本柱穴にともなう土器は、白磁碗1個体のみである。しかし、この白磁碗については、中国からもたらされたものであるが、日本における出土時期にかなりの時期幅をもっている。したがって、この白磁碗のみをもって本柱穴の具体的な時期を判断することは困難である。そこで、本柱穴については、本柱穴が位置する掘立柱建物群および柱穴群のもつ時期幅、川除13～14期のなかにおさまるものと考えたい。

Ｐ３４

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの北西部に位置する。Ｐ33の南西約1mにあたる。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模　平面形は円形を呈する。掘り方の径は30cmを測り、検出面からの深さは22cmである。また、柱抜取り穴の径は14cmである。

出土遺物　柱抜取り穴内および掘り方内より出土している。

抜取り穴　須恵器と土師器が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。須恵器は椀が、土師器は小皿と甕が出土している。

掘り方内　須恵器・土師器と瓦器が出土しているが、図化できたのは須恵器と土師器である。

須恵器　椀と小皿が出土しているが、図化できたのは小皿のみである。（第617図1521）体部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部は肥厚している。底部は回転糸切りにより切り離されている。

土師器　大皿・小皿・托・鍋の各器種が出土しているが、図化できたのは大皿（第167図1533）と小皿（第618図1541）である。

大皿　口縁部を1段の強いナデ調整により仕上げ、外方に外反させている。底部は手捏ねにより成形されている。皿としては深い形態をとるものである。

小皿　口縁部を回転ナデ調整により仕上げ、底部は回転糸切りにより切り離されている。

瓦器　椀が出土している。

時期　柱抜取り穴内および掘り方内から比較的多く出土しているが、両者の間に明確な時期差を認めることは困難である。したがって、本柱穴出土土器から総体的に判断して、川除14期と考えられる。

Ｐ３５

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの北部に位置する。ＳＤ113とＳＤ121とが北側で交差する地点の南東2mの位置で、ＳＤ121の北側に隣接している。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　平面形は円形を呈する。掘り方の径は35cmを測り、検出面からの深さは28cmである。ま

た、柱抜取り穴の径は15cmである。

出土遺物　柱抜取り後の整地層および柱抜取り穴内より出土している。

整地層　須恵器が出土している。

須恵器　須恵器は椀と甕が出土しているが、図化できたのは甕（第617図1528）のみである。ほぼ直線的に立ち上がる肩部に対して、口縁部が短く「く」字形に屈曲している。頸部から口縁部にかけては内外面とも回転ナデ調整により仕上げられており、口縁部は端面をもつ。肩部内面は口頸部同様回転ナデ調整により仕上げられ、外面は右上がりないし左上がり方向のタタキ成形により仕上げられている。

抜取り穴　須恵器と土師器が出土しているが、いずれも図化できなかった。

須恵器は小皿が、土師器は小皿と甕が出土している。

時期　図化できたのは整地層出土の須恵器の甕である。この甕をもって時期を特定することは困難であるが、周囲の柱穴との関係から、川除13期と考えられる。

Ｐ３６

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの北西部に位置する。Ｐ34の南西約２mに位置する。またＳＤ113の東にほぼ接し、その間隔は約10cmである。他の遺構との切り合い関係は認められない。

本柱穴内、柱抜取り穴内において20cm×10cm程の角礫を検出している。柱の沈み込みを防ぐためのものと考えられる。

形状・規模　平面形は円形を呈する。掘り方の径は30cmを測り、検出面からの深さは60cmである。また、柱抜取り穴の径は18cmである。

出土遺物　柱抜取り穴内および掘り方内より出土している。

抜取り穴　須恵器・土師器と瓦器が出土している。

須恵器　椀と小皿が出土しているが、図化できたのは小皿（第617図1516）のみである。他の遺構出土の小皿と比較して、浅く底径が大きい点が特徴的である。口縁部は回転ナデ調整により仕上げられ、底部は回転糸切りにより切り離されている。

土師器　小片のため器種の特定も困難である。

瓦器　椀が出土している。

掘り方内　須恵器・土師器と瓦器が出土しているが、いずれも図化できなかった。

須恵器は椀が、土師器は小皿が、瓦器は椀がそれぞれ出土している。

時期　掘り方内出土の土器は小片のため時期を判断することは困難である。したがって、図化できた柱抜取り穴内出土の須恵器の小皿を中心に時期を判断すると、川除12～14期の範疇におさまるものと考えられる。

Ｐ３７（図版159）

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの中央部に位置する。Ｐ36の南約60cmにあたる。ＳＤ113と掘り方は接している。またＳＢ68のＰ12と掘り方の一部が重複しているが、両者の前後関係は明らかにできなかった。

形状・規模　平面形は円形を呈する。掘り方の径は30cmを測り、検出面からの深さは53cmである。また、柱抜取り穴の径は16cmである。

出土遺物　柱抜取り後の整地層、柱抜取り穴内および掘り方内より出土している。

整地層　須恵器の椀が出土している。（第617図1512）体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁端部はわずかに肥厚している。

抜取り穴　須恵器と土師器が出土しているが、いずれも図化できなかった。須恵器・土師器ともに小皿が出土している。

掘り方内　須恵器と土師器が出土しているが、これらの土器についても図化できなかった。須恵器は椀が出土している。土師器については、小片のため器種の特定ができない。

時期　整地層・柱抜取り穴内および掘り方内より出土しているが、多くは小片で、図化できたのは整地層出土の須恵器の椀のみである。したがって、この椀から時期を判断すると、川除14期と考えられる。

Ｐ３８

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの中央部に位置する。ＳＤ121の南側に掘り方をほぼ接して位置し、ＳＤ121とＳＤ139が切り合う地点より、北西約３mにあたる。

形状・規模　平面形はほぼ円形を呈する。掘り方の径は30cmを測り、柱抜取り穴の径は16cmである。

出土遺物　柱抜取り穴内と掘り方内より出土している。

抜取り穴　須恵器・土師器と瓦器が出土しているが、いずれも図化できなかった。須恵器は椀と捏鉢が、土師器は小皿が、瓦器は椀が出土している。

掘り方内　須恵器・土師器と瓦器が出土しているが、図化できたのは瓦器のみである。

須恵器は椀が、土師器は小皿が出土している。

瓦器　椀が出土している。（第618図1554）比較的浅い椀に断面方形の高台が貼り付けられている。口縁部は２段の強いナデ調整により仕上げられている。暗文は内外面とも施されているが、内面に対して外面の暗文は数ケ所に施されている程度である。

時期　柱抜取り穴内および掘り方内より出土しているが、図化できたのは掘り方内出土の瓦器椀のみである。この瓦器椀をもとに時期を判断すると、川除14期と考えられる。

Ｐ３９（図版159）

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの中央部に位置する。Ｐ36の東約3.5mに位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　平面形は楕円形を呈する。長軸で37cm、その直交方向で30cmを測る。検出面からの深さは26cmである。また、柱抜取り穴の径は15cmである。

出土遺物　柱抜取り穴内および掘り方内より出土している。

抜取り穴　須恵器・土師器および瓦器が出土している。

須恵器　椀と小皿が出土しており、小皿のみ図化することができた。（第617図1526）底部から口縁部にかけて大きく内湾しながら立ち上がり、口縁端部は肥厚することなくおさめられている。他の須恵器の小皿と比べて、器壁が全体的に厚いのが特徴的である。底部は回転糸

切りにより切り離されている。

他　土師器は小皿と坏が、瓦器は椀が出土しているが、いずれも図化できなかった。

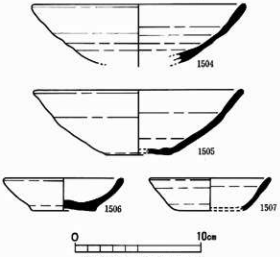
掘り方　土師器の小皿が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　時期を判断する対象となるのは、柱抜取り穴内より出土している須恵器の小皿のみである。ただし、この小皿は他の小皿と形態的に若干特徴を異にしているため、明確に時期を判断することは困難である。しかし、法量的・技法的にみると他の小皿と大差ないことから、川除12～14期の範疇におさまるものと考えたい。

P40

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Bの中央部に位置する。SD139と重複しており、SD139を底まで掘り下げた段階で確認できた柱穴である。ただし、SD139上面で充分な精査を行うことができなかったため、SD139との前後関係については明らかにしえない。

形状・規模　平面形は円形を呈する。ただし、本柱穴については柱抜取り穴の痕跡は確認できなかった。掘り方の径は40cmを測り、検出面（SD139の底）からの深さは17cmである。



第618図　P40出土土器

出土遺物　すべて掘り方内より、須恵器のみが出土している。椀と小皿が出土している。

椀　図化できた2個体とも同じタイプに分類できるもので、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、端部を肥厚させている。

小皿　2個体図化できたのであるが、若干特徴を異にする。1506は、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、端部を肥厚させるものである。底部は回転糸切りにより切り離されており、しっかりした平底をなしている。1507は体部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部を肥厚させないものである。本遺跡出土の小皿のなかではほとんどみかけないタイプの小皿である。

時期　掘り方内より出土した土器から判断して、川除14期と考えられる。

第241表　P40出土土器観察表

番号	器種	法量（cm）						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	厚さ	最大径	胎土			
1504	須恵器・椀	(16.8)	残4.7	—	—	—	—	灰白	口縁部1/8	1～5mm大の礫含む
1505	須恵器・椀	(16.2)	5.1	(5.1)	—	—	31	灰～灰白	1/2	黒色の粒を多く含む
1506	須恵器・小皿	(9.1)	2.6	(5.2)	—	—	28	灰～暗灰	1/2	
1507	須恵器・小皿	(9.4)	2.6	(5.0)	—	—	27	灰	口縁部1/2	

Ｐ４１（図版１５９）

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの南東部に位置する。ＳＤ139の南端部に位置し、当該溝の掘り方を切り込んでいる。また、ＳＢ69のＰ７の掘り方をも切っている。

形状・規模　平面形はほぼ円形を呈する。掘り方の径は36cmを測り、検出面からの深さは52cmである。また、柱抜取り穴の径は15cmである。

出土遺物　柱抜取り穴内および掘り方内より出土している。

抜取り穴　須恵器・土師器・瓦器が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。須恵器と瓦器は椀が出土している。土師器については、器種の特定は困難である。

掘り方内　須恵器と瓦器が出土している。

須恵器　椀・小皿および甕が出土しているが、図化できたのは小皿（第617図1519）のみである。この小皿は、底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部は肥厚せずにおさめられている。

瓦器　椀が出土しているが、図化できなかった。

時期　柱抜取り穴内および掘り方内より出土しているが、時期を判断できるのは掘り方内出土の須恵器の小皿のみである。したがってこの小皿を中心に時期を判断すると、川除12～14期と考えられる。

Ｐ４２

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの南部に位置する。ＳＤ121南辺東部で、ＳＤ121の掘り方にほぼ接している。

形状・規模　平面形は、ほぼ円形を呈する。掘り方の径は42cmを測り、検出面からの深さは32cmである。また、柱抜取り穴の径は20cmである。

出土遺物　柱抜取り穴内および掘り方内より出土している。

抜取り穴　須恵器と土師器が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。須恵器は椀が、土師器は小皿と椀が出土している。

掘り方内　須恵器と黒色土器が出土している。このうち、図化できたのは黒色土器のみである。

須恵器　椀と甕が出土しているが、小片のため図化できなかった。

黒色土器　椀が出土している。（第618図1550）内面のみ黒化した、口径8.5cm・器高3.3cmと小型の椀である。底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がる。口縁部はほぼ直線的で、端部を丸くおさめる。内外面とも横方向を主体とした丁寧なミガキが施されている。内面の方がより丁寧で、見込みから口縁部まで全面に施されている。これに対して外面は、上半部のみが施されている。

底部には輪高台が貼り付けられている。この高台の内側には、貼り付けた際のあたりと考えられる、不定形な紡錘形の窪みが底部中心部から放射方向に認められる。

時期　柱抜取り穴および掘り方内から出土しているが、時期を判断する根拠となるのは掘り方内出土の黒色土器のみである。この土器から、川除12期と考えられる。

Ｐ４３

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの南東部に位置する。ＳＤ113とＳＤ119がＴ字形に切り合う地点の北東隅に位置し、両溝を切っている。

形状・規模　平面形は円形を呈する。掘り方は径38cmを測り、検出面からの深さは50cmである。また、柱抜取り穴の径は18cmである。

出土遺物　柱抜取り穴内および掘り方内より出土している。

抜取り穴　須恵器・土師器および瓦器が出土している。

須恵器は椀が出土している。（第617図1508）底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁端部が肥厚している。

土師器は大皿が、瓦器は椀が出土しているが図化できなかった。

掘り方内　土師器が出土しているが、図化どころか器種も特定できない。

時期　時期を判断できるのは、柱抜取り穴内出土の須恵器椀のみである。この椀から判断すると、川除14期と考えられる。

Ｐ４４（図版159）

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの南西部に位置する。ＳＤ113とＳＤ121が南側で交差する地点の南西側に位置し、ＳＤ121南西部コーナーの西約１mにあたる。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模　平面形は円形を呈する。掘り方の径は24cmを測り、検出面からの深さは33cmである。また、柱抜取り穴の径は16cmである。

出土遺物　柱抜取り穴内および掘り方内より出土している。

抜取り穴　須恵器・土師器と白磁が出土している。

須恵器　椀が出土している。（第617図1513）体部から口縁部にかけての変換部が大きく屈曲気味に内湾し、口縁部はわずかに肥厚する。見込み内面は強い回転ナデ調整により１段落ち込み、底部は比較的しっかりしており平高台の痕跡を残している。

土師器　土師器と白磁については、いずれも小片のため器種の特定は困難である。

掘り方内　須恵器と土師器が出土しているが、いずれも図化できなかった。須恵器は椀と甕が、土師器は小皿と坏が出土している。

時期　土器の出土量がわずかであるため、時期を判断できるのは柱抜取り穴内出土の須恵器の椀のみである。この須恵器椀から時期を判断すると、川除13期と考えられる。

Ｐ４５

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの西側に位置する。ＳＤ121の北西コーナーの南約３mに位置し、ＳＤ121西辺の東約50cmにあたる。ＳＢ74のＰ12の北東約50cmである。

形状・規模　平面形は円形を呈する。掘り方の径は24cmを測り、検出面からの深さは33cmである。また、柱抜取り穴の径は16cmである。

出土遺物　柱抜取り穴内および掘り方内より出土している。

抜取り穴　須恵器と土師器が出土しているが、いずれも図化できなかった。須恵器は椀が、土師器

は小皿が出土している。

掘り方内　土師器の坏が出土している。（第617図1534）底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がっている。口縁端部はわずかに肥厚している。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられており、底部の切離しは回転糸切りによっている。

時期　柱抜取り穴内および掘り方内より出土しているが、時期を判断できるのは掘り方内出土の土師器の坏のみである。この坏から時期を判断すると、川除13～14期と考えられる。

Ｐ４６

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの西部に位置する。ＳＤ121西辺の南部で、ＳＤ121を切っている。ＳＢ75のＰ29の南側で掘り方を接している。

形状・規模　平面形はほぼ円形を呈する。掘り方の径は28cmを測り、検出面からの深さは19cmである。また、柱抜取り穴の径は22cmである。

出土遺物　柱抜取り穴内より出土している。

須恵器・土師器および瓦器が出土しているが、図化できたのは須恵器のみである。

須恵器　椀と小皿が出土しているが、小皿についてのみ図化できた。（第617図1517）底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部は強い横ナデ調整により外反し薄くおさめられている。底部から体部にかけては器壁が厚い点と他の小皿に比べて底径が大きい点が特徴的である。底部は回転糸切りにより切り離されている。

他　土師器と瓦器が出土している。土師器は甕が、瓦器は小皿が出土している。

時期　柱抜取り穴内のみから出土しているため、これらの土器から時期を判断すると、川除12～14期と考えられる。

Ｐ４７

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの西部に位置する。Ｐ46同様、ＳＤ121西辺中央部でＳＤ121を切っている。Ｐ46の南約20cmにあたる。

形状・規模　平面形は円形を呈する。掘り方の径は48cmを測り、検出面からの深さは18cmである。また、柱抜取り穴の径は17cmである。

出土遺物　柱抜取り穴内より出土している。出土しているのは須恵器と土師器である。

須恵器　椀が出土しているが、図化できなかった。

土師器　ミニチュアが出土している。（第618図1549）このミニチュアは、形態的特徴から台子の身を模倣したものと考えられる。平底の底部から内湾気味に立ち上がり、頸部から口縁部にかけて強いナデ調整により上方に立ち上がり、口縁端部は薄くおさめられている。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられ、底部は回転糸切りにより切り離されている。

時期　本柱穴にともなう土器で、図化できたのは土師器のミニチュアのみである。しかし、ミニチュア上器１個体のみでは、時期を特定することは困難である。ただし、埋土が他の柱穴と同じであること、およびＳＤ121を切っている点などを考慮に入れると、川除13期ないし14期と考えられる。

Ｐ４８

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの西部に位置する。ＳＤ121の中間部の西約３ｍに位置する。掘立柱建物群とほぼ同時期と考えられる浅い溝を切っている。

形状・規模　平面形は円形を呈する。掘り方の径は14cmを測り、検出面からの深さは17cmである。ただし、本柱穴内では柱抜取り穴は確認できなかった。

出土遺物　掘り方内より須恵器と土師器が出土しているが、土師器は図化どころか器種も特定できない。須恵器は椀が出土している。（第617図1509）底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁端部はわずかに肥厚するとともに外反している。見込みは強いナデ調整により段をもつ。

時期　出土遺物がわずかである上に、図化できたのは須恵器の椀１個体のみである。したがって、この須恵器をもとに時期を判断すると、川除13期と考えられる。

Ｐ４９

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの西部に位置する。Ｐ47の西約4.5mにあたる。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模　平面形は円形を呈する。掘り方は径27cmを測り、検出面からの深さは43cmである。また、柱抜取り穴の径は17cmである。

出土遺物　柱抜取り穴内より須恵器の椀が出土している。（第617図1511）底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに肥厚している。底部は他の須恵器の椀と比べて厚く仕上げられている。底部は回転糸切りによって切り離されている。

時期　本柱穴にともなう土器は、須恵器の椀１個体のみである。したがってこの椀をもとに時期を判断すると、川除13期と考えられる。

Ｐ５０

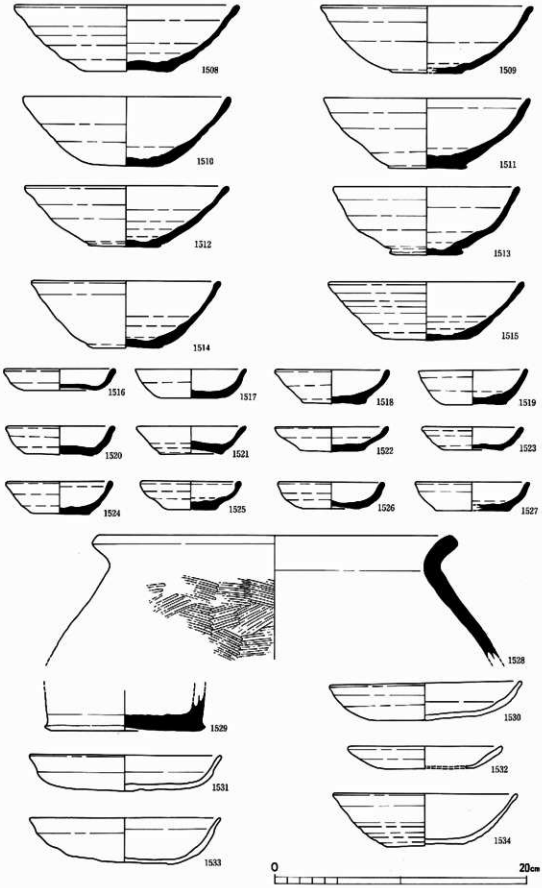
検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの西部に位置する。Ｐ49の南東約３ｍにあたる。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模　平面形はわずかに楕円形を呈する。掘り方の規模は長軸で28cm、その直交方向で22cmをを測る。また、柱抜き取り穴の径は13cmである。

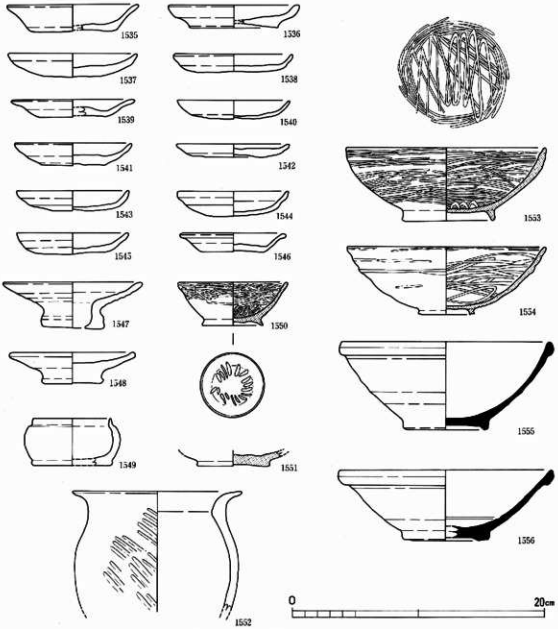
出土遺物　柱抜き取り穴内および掘り方内より出土している。柱抜き取り穴内からは須恵器の壺の底部片が出土している。（第617図1529）相野窯跡群産と考えられる土器で、底部はヘラ起こしの後ナデ調整により仕上げられている。内面は強いユビナデ調整により仕上げられている。

掘り方内からも須恵器が出土しているが、小片のため図化できなかった。器種は椀である。

時期　出土土器がわずかのため、実際に時期を判断できるのは、須恵器の壺の底部に限られる。しかし、この底部についても時期幅をもつもので、時期を特定することはできない。いずれにしても、相野窯跡群産であることから、川除11期と考えられる。



第617図　IV区柱穴出土土器（1）



第618図　Ⅳ区柱穴出土土器（２）

第242表　Ⅳ区　柱穴出土土器観察表（１）

番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	頸径	最大径	指数	色調	残存状況	特徴・その他
1508	縄文器・鉢	(17.6)	5.3	(6.4)	—	—	30	灰白	1/4	P43付近出土
1509	縄文器・鉢	(16.6)	5.3	(5.4)	—	—	31	灰	1/4	P48掘り方出土
1510	縄文器・鉢	16.2	5.5	5.4			33	灰	口縁部完存	P32掘り方出土
1511	縄文器・鉢	16.2	5.6	6.2			34	灰白	完存	P49付近出土
1512	縄文器・鉢	(16.0)	4.8	5.7			30	灰白	5/6	P37整地層出土
1513	縄文器・鉢	(14.6)	5.4	(5.4)			36	明黄灰	1/2	P44付近出土
1514	縄文器・鉢	14.8	5.3	6.0			35	灰	口縁部1/2・底部完存	P32掘り方出土
1515	縄文器・鉢	(15.2)	4.6	(6.4)			30	明黄灰	口縁部～底部1/3	P26撹乱層出土
1516	縄文器・小鉢	(8.6)	1.7	(5.8)			19	灰白	口縁部～底部1/2	P36付近出土

第243表　Ⅳ区　柱穴出土土器観察表（2）

番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胴径	最大径	指数	色調	残存状況	特徴・その他
1517	須恵器・小皿	8.6	2.3	5.2			26	灰	ほぼ完存	成形中や不良　P46柱痕出土
1518	須恵器・小皿	8.8	2.7	5.1			30	灰白	口縁部～底部2/3	P28掘り方出土
1519	須恵器・小皿	(8.4)	2.8	(5.2)			33	灰	ほぼ完存	P41掘り方出土
1520	須恵器・小皿	8.4	2.3	5.4			27	明黄灰	ほぼ完存	P22掘り方出土
1521	須恵器・小皿	(8.4)	2.2	5.0			26	灰白	口縁部～底部1/3	P34掘り方出土
1522	須恵器・小皿	(9.2)	2.0	(5.0)			21	灰	口縁部～底部1/2	P27掘り方出土
1523	須恵器・小皿	7.8	1.8	2.7			23	灰	完存	P32整地層出土
1524	須恵器・小皿	8.1	2.6	4.7			32	灰白	ほぼ完存	P32整地層出土
1525	須恵器・小皿	7.6	2.3	4.2			30	灰白	完存	P25整地層出土
1526	須恵器・小皿	(8.2)	2.1	(4.6)			25	灰白	口縁部～底部1/3	P39柱痕出土
1527	須恵器・小皿	(8.8)	2.3	(6.0)			26	灰白	口縁部～底部1/2	P22掘り方出土
1528	須恵器・甕	(28.0)	残9.5	—	(26.2)	—	—	灰	口縁部1/6	P35整地層出土
1529	須恵器・壺	—	残3.1	(12.8)	—	—	—	灰白	底部4/5	底部ヘラ起こし　P50柱痕出土
1530	土師器・大皿	15.0	3.5				23	淡黄橙	完存	P32整地層出土
1531	土師器・大皿	(15.0)	3.9				28	灰白～淡黄橙	口縁部～底部1/3	P32整地層出土
1532	土師器・小皿	(12.2)	2.0	(7.4)			16	淡黄	口縁部～底部1/8	P14掘り方出土
1533	土師器・大皿	14.9	3.6				24	淡黄橙	ほぼ完存	P34掘り方出土
1534	土師器・坏	14.7	4.2	6.2			28	灰白～橙	口縁部1/2・底部完存	底部回転糸切り　P45掘り方出土
1535	土師器・小皿	(10.2)	2.1	(6.6)			20	にぶい橙	口縁部～底部1/4	底部回転糸切り　P16掘り方出土
1536	土師器・小皿	(10.0)	1.8	(6.8)			18	淡橙～淡黄橙	口縁部～底部1/2	底部回転糸切り　P17柱痕出土
1537	土師器・小皿	(10.0)	1.9	(5.0)			19	淡黄橙	口縁部～底部1/2	P32掘り方出土
1538	土師器・小皿	(9.6)	1.4				14	淡黄橙	口縁部～底部1/6	底部回転糸切り　P32整地層出土
1539	土師器・小皿	(9.4)	1.4	(5.4)			14	灰白	口縁部～底部1/2	底部回転糸切り　P30整地層出土
1540	土師器・小皿	(9.0)	1.5	(3.6)			16	淡黄橙	口縁部～底部1/2	P18柱痕出土
1541	土師器・小皿	(9.2)	1.8	(4.2)			19	淡黄橙	ほぼ完存	底部回転糸切り　P34柱痕出土
1542	土師器・小皿	(8.8)	1.1	(5.4)			12	橙	ほぼ完存	底部回転糸切り　P15掘り方出土
1543	土師器・小皿	8.9	1.6				17	淡黄橙	口縁部3/4・底部完存	P32整地層出土
1544	土師器・小皿	8.6	2.0				23	にぶい橙	ほぼ完存	粘良な粘土　P21掘り方出土
1545	土師器・小皿	8.6	1.7				19	淡黄橙	完存	粘良な粘土　P32整地層出土
1546	土師器・小皿	(8.0)	1.5	(5.0)			18	灰白	口縁部～底部2/3	底部回転糸切り　P31柱痕出土
1547	土師器・托	10.8	4.7	4.6			43	淡黄橙	完存	粘良な粘土・底部回転糸切り　P25整地層出土
1548	土師器・托	(9.6)	5.0	(4.4)			52	淡黄橙	口縁部1/3・底部完存	底部回転糸切り　P29整地層出土
1549	土師器・ミニチュア	(6.0)	3.7	(6.0)			61	淡黄橙	口縁部～底部1/4	底部回転糸切り　P47柱痕出土
1550	黒色土器・椀	(8.5)	3.9	4.8			45	黒～灰色	口縁部～底部1/2	A類椀　P42掘り方出土
1551	黒色土器・椀	—	残1.2	5.6	—	—	—	黒	底部完存	糸切痕・底部糸切り　P13柱痕出土
1552	土師器・甕	(13.4)	残9.4	—	(10.8)	(13.0)	—	にぶい黄橙	1/5	P15掘り方出土
1553	瓦器・椀	(15.6)	5.8	(7.0)			37	灰	ほぼ完存	内外面とも暗文あり　P19柱痕出土
1554	瓦器・椀	(15.8)	5.3	(3.7)			33	灰	口縁部～底部1/4	内外面とも暗文あり　P36掘り方出土
1555	白磁・碗	(16.4)	6.9	(6.2)			42	灰白	口縁部～底部1/2	P33整地層出土
1556	白磁・碗	(16.6)	5.6	(6.6)			33	灰	口縁部1/8・底部1/2	P20柱痕出土

（３）土壙

ＳＫ１０７

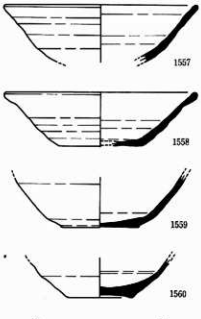
検出状況　Ⅳ区北西部小微高地ｄの中央西寄りで検出された。西半部は調査区外であるため、詳細は不明である。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　平面形は楕円形である。規模は、検出面での長径140cm以上、その直交方向で83cmである。土壙底での長径は120cm以上、その直交方向は60cmを測る。検出面からの深さは14cmである。断面形は皿形を呈している。

埋土　１層であり、灰白色シルト質極細砂の堆積が認められた。

出土遺物　須恵器の椀・甕、土師器の小皿・鍋、白磁の皿などが出土している。このなかで、須恵器の椀と白磁の皿を図化した。

須恵器　椀の底部切離し手法には、回転糸切りを行うもの（1559）と、ヘラ起こしのもの（1558）の二者がある。底部にヘラ起こしを行う1558については、他に比べ、体部の立ち上がりの角度が緩く、また口縁部が若干外反するなど形態的な差異も認められる。



第610図　ＳＫ107出土土器

白磁　皿は、底部にわずかに高台状の削り出しがみられ、体部中位で傾きが変化するものである。

時期　川除14期である。

第244表　ＳＫ107出土土器観察表

番号	器種	法量（cm） 口径	器高	底径	頸径	最大径	総数	色調	残存状況	特徴・その他
1557	須恵器・椀	(15.2)	残4.5	—	—	—	—	灰白	口縁部1/4	
1558	須恵器・椀	(15.0)	4.3	(6.4)	—	—	28	灰白	口縁部欠・底部1/3	底部ヘラ起こし
1559	須恵器・椀	—	残4.1	(6.4)	—	—	—	灰白	底部1/2	底部糸切り
1560	白磁・皿	—	残3.1	(5.6)	—	—	—	灰白	底部1/4・体部傾斜	底部ヘラ削り

ＳＫ１１２（図版140・160・176）

検出状況　Ⅳ区のほぼ中央、小微高地ｄの中央で検出された。ＳＢ56・ＳＢ63の間に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　平面形は不整形である。規模は、検出面での長径83cm、短径77cmであり、土壙底での長径50cm、短径48cmを測る。検出面から土壙底までの深さは11cmである。断面形は皿形を呈している。

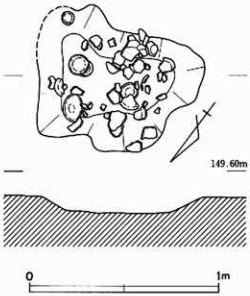
埋土　灰色シルト質極細砂の堆積が認められた。

出土遺物　土器には須恵器の椀・小皿、土師器の小皿・坏・椀、黒色土器の椀があり、鉄器には刀子1点が出土している。

須恵器　椀4点を図化した。底部は回転糸切りによっており、低い高台をもつものである。小皿も底部の切り離しには回転糸切りの手法を用いている。

土師器　小皿の底部の切り離しには、ヘラ起こしによる1570を除けばすべて回転糸切りの手法を用いており、これらの調整にはロクロナデを使用している。他に坏・椀が出土している。

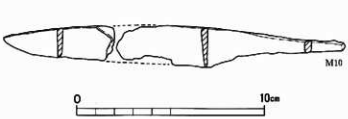
黒色土器　多量のA類椀が出土している。口縁部外面に横方向の強いナデを施すものや、口縁部内面に段を形成するものが存在する。



第620図　ＳＫ112

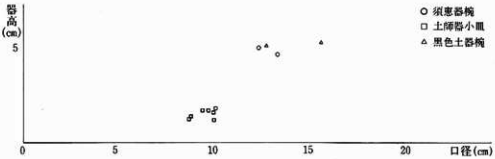
器面の調整には、内外面にナデ仕上げを行う1574、内面に暗文をもつ1585の他は、内面にヘラミガキを施すものが多くみられる。高台も、貼り付けによって、外方に踏ん張る断面三角形の輪高台をもつものと、削り出しによる平高台のものの二者がある。

鉄製刀子　切先から茎尻までが残存しているが、刀身の部分で2分しているため、正確な大きさは不明である。棟関はつくり出しておらず、茎に目釘穴も認められない。刀身の断面の形状から、切先に近い部分の刃は鈍くなっていることがわかる。推定される全長は18.2cm、刀身の元幅は2.1cmを測る。

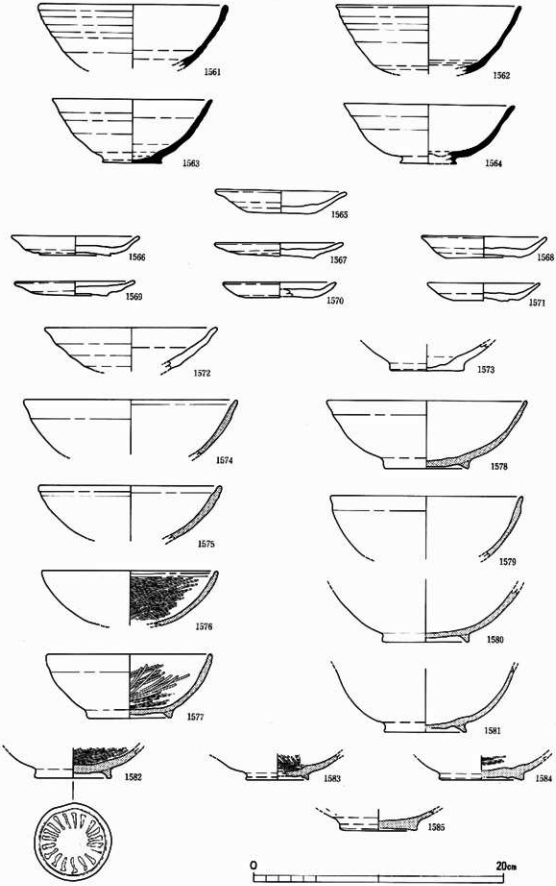


第621図　ＳＫ112出土鉄器

時期　出土土器から川除12期である。



第622図　ＳＫ112出土土器法量分布



第623図　ＳＫ112出土土器